

恋ヶ窪廃寺跡発掘調査概報

I

—西国分寺駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴う調査—

1989年3月

国分寺市遺跡調査会

序

武蔵国分尼寺跡の北方約1 km、中央線の南側、府中街道に沿う地より布目瓦や板碑が出土し若干の旧礎と思われるものが林の中にあることは早くより知られていました。

長い間保存されていたこの地も昭和46年の西国分寺駅舎建設の前後から建設工事の急増によりまして状況が一変し、次第に開発の波にさらされるようになりました。

恋ヶ窪廃寺跡に於ける発掘調査は今回を含め過去6回に及んでおりまして、古代～中世にかかる寺院跡であることが明らかになっており、以前の「恋ヶ窪堂址」の呼称を改めたものであります。

今般、西国分寺駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴い、遺跡地の西半でビル建設工事等が行われることとなり、事前の発掘調査が実施されるに至りました。再開発事業のスケジュールとの調整を経て短期の調査期間が設定されたため、写真測量の導入などによってほぼ順調に進捗し本文に掲げる成果をあげ完了することができました。

本書刊行にあたり、終始深い御理解と御協力をいただきました関係者の方々に心から感謝申し上げます。

平成元年3月31日

調査会長 星野亮勝

例 言

1. 本書は東京都国分寺市泉町に所在する恋ヶ窪廃寺跡に於ける西国分寺駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 恋ヶ窪廃寺跡に於ける発掘調査は過去6回にわたって実施され、この内第1次と第2次については報告書が刊行されている。新調査会になって遺跡毎に発掘調査概報を順次刊行することとなったので、本冊を『恋ヶ窪廃寺跡発掘調査概報Ⅰ』として発行するものである。
3. 発掘調査は国分寺市遺跡調査会が住宅・都市整備公団東京支社の委託を受けて実施した。現場作業は昭和62年8月3日に着手し昭和63年4月28日に終了した。室内整理作業は国分寺市遺跡調査会事務所において昭和63年4月11日に着手して平成元年3月31日に終了した。

今次調査は本跡が武蔵国分寺関連遺跡であることから、武蔵国分寺跡に於いて昭和48年来実施されている調査の内、第294次調査として実施したものである。

遺物等への注記略称は「MK IV-294」としている。

4. 現地に於ける調査より報告書作成に至る作業は、滝口宏団長の指示の下、調査員福田信夫が担当し、上敷領久がこれを補けた（IV 先土器時代の調査、及び中近世陶器）。
5. 発掘調査・報告書作成の過程で次の方々の協力・参加を得た。厚く御礼申し上げます。（順不同・敬称略）

早川泉・河内公夫

発掘（※は整理共）

岩崎洋・渡辺一美・秋池勝利・鈴木靖彦・大元進太郎・比留間清・山崎一・雨宮毅・和田光弘

整理（※は原稿浄書・校正）

坂田眞佐子・穴戸和子・野中節子・松田浩子・小林幸江・大沢華子・若林雅子・島崎恵美子・鈴木雪江・山口啓子

基準点測量・写真測量（株式会社パスコ東京支社）、土木（株式会社浅沼組東京支店）

6. 遺構は、各遺構毎に連続番号を付し、下記の遺構記号を冠して表示する。本文中に於ては、「SD208溝跡」・「SK1053土坑」の様に記述する。その番号は武蔵国分寺跡（恋ヶ窪廃寺跡を含む）全体に於ける登録番号であって、本調査区のみで完結しない。

なお、縄文時代遺構については末尾にJを付す。

S B	礎石建物跡・掘立柱建物跡	S D	溝跡
S K	土坑・土壙墓・火葬墓	P	小穴

7. 遺構配置図表示の数字は、発掘基準線中心点からの距離を表わす。発掘基準線中心点と国分僧寺金堂中心点の位置関係は、前者の南北基準線上、中心点南26.276 m に後者がある。

僧寺中軸線の方位は発掘南北基準線と一致し、南北から $7^{\circ}08'03''$ それぞれ西偏する。

8. 断面図における水系レベルは、全て海拔高79.0 m である。

本文目次

I 調査に至る経過	1
1. 事業の概略	1
2. 取扱いについて	1
3. 協議の経過	1
II 調査地区の概観	7
1. 調査地区の位置・立地	7
2. 層 序	7
III 調査経過	9
IV 先土器時代の調査	12
V 縄文時代の調査	14
1. 遺物包含層の発掘と出土遺物	14
2. 検出遺構と出土遺物	23
3. 小 結	24
VI 歴史時代の調査	30
1. 発見遺構と出土遺物	30
2. 小 結	33
VII 結 語	40

挿 図 目 次

第1図	調査地区の位置（武蔵国分寺跡全体図）	5
第2図	調査地区の位置（市内東南部の先土器・縄文時代遺跡地図）	6
第3図	標準層序	8
第4図	発掘区の区分及び発掘深度図	10
第5図	先土器時代の石器	13
第6図	土器出土分布図	17
第7図	石器出土分布図	18
第8図	礫出土分布図	19
第9図	縄文時代遺構平面全体図	20
第10図	調査地区周辺縄文時代検出遺構全体図	27
第11図	第244次調査地区検出の集石土坑	28
第12図	第244次調査地区検出の土坑	29
第13図	歴史時代遺構平面全体図	31
第14図	調査地区周辺歴史時代検出遺構全体図	34
第15図	第244次調査地区検出の土坑	38

表 目 次

第1表	調査工程表	11
-----	-------	----

図 面 目 次

図面1	SS45・SK1057J・1058J 土坑実測図
図面2	礫集中地点実測図
図面3	出土土器・石器実測図
図面4	SD208・209溝跡実測図
図面5	SK1053～1056、1097～1100土坑実測図

図 版 目 次

図版1	発掘状況・先土器時代遺物出土状態・標準層序
図版2	縄文時代遺物出土状態・SK1057J 土坑
図版3	SK1058J 土坑
図版4	SS45集石土坑
図版5	縄文土器・石器
図版6	縄文時代・歴史時代調査区全景
図版7	SD208・209溝跡
図版8	SK1053～1056土坑
図版9	SK1097～1100土坑

I 調査に至る経過

1. 事業の概略

調査の原因たる当該事業は西国分寺周辺整備区域(約40ha)の一環として昭和54年3月の「西国分寺駅周辺整備構想」に基づき、昭和60年3月に都市計画決定がなされたもので、住宅・都市整備公団を施工者とするものである。

昭和60年に市役所主管課(現 開発部西国分寺駅周辺整備室)より照会があり、調査を要する旨の回答(いずれも口頭)を行っていた。

昭和61年1月に住宅・都市整備公団東京支社長より文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく文化庁長官宛埋蔵文化財発掘通知書が提出された。土木工事の概要は次の通りである。

- a. 工事件名 西国分寺駅南口地区第一種市街地再開発事業
- b. 所在地 国分寺市泉町三丁目33先
- c. 面積 1,371㎡(掘削面積も同じ)
- d. 工事計画 再開発ビル(地上12階、地下2階)建設
- e. 工期 約3カ年

2. 取扱いについて

当該地は古代から中世にかかる恋ヶ窪廃寺跡の主体部の西方にあり、且つ縄文時代中期の日影山遺跡に隣接しており、周辺の道路下での調査によって両遺跡に係わる遺構と遺物が少量ながらも全域において検出されるものと予測された。

従い、土木工事により遺跡にかかる当該事業地全域が掘削されるので、全域を対象とする事前の発掘調査の要があるので、調査計画書案を作成して協議を進めることとした。

なお、当該地の北側の一角について、遺跡の北への広がりを把握する為に確認調査を行う事とした。

3. 協議の経過

協議は国分寺市教育委員会文化財課と住宅・都市整備公団東京支社(都市再開発部再開発課、同再開発企画課、同市街地土木課、西国分寺再開発事務所事業計画課)並びに市役所開発部西国分寺駅周辺整備室の間で行った。

昭和61年1月13日の第1回協議において事業概況の説明を受けてから、昭和62年7月7日に

協議が整うまで約1年半、12回に及んだ。当該事業が市街地の再開発事業の為、地権者との調整が難行したことなどによる。

当該事業は再開発事業の為、土地の権利譲渡・明渡し・建物除却・整地工事を終えて建設工事が発注されるまでの時間的余裕がないので、遺構・遺物の予測数量を周辺調査事例より予測される最大値を採用したうえで、作業員の大量投入（公団提供）と写真測量の導入により短期の工程を組むこととした。

最終合意案は次の通りとなった。

- 1) 調査面積 1,371㎡
- 2) 調査期間 8.5カ月（62年度実施）
- 3) 委託費 25,172,000円（土木委託費は公団施工）

室内整理・報告書作成作業の経費については現場作業の結果によって協議することとした。

なお、事業規模が大きく長期にわたることから、協議により合意した調査対象、調査期間、委託の方法、調査費用、委託費の支払い方法・決算・清算、出土品の取扱い、新たな遺跡の取扱い等埋蔵文化財の取扱い措置及び発掘調査の実施方法について、住宅・都市整備公団と国分寺市教育委員会及び国分寺市遺跡調査会とで「西国分寺駅南口地区埋蔵文化財発掘調査に関する協定書」を昭和62年7月13日に締結した。

協定に基づき、履行期間を昭和62年7月16日から昭和63年3月31日とし委託金額を25,172,000円とする業務委託契約を締結し、別記経過を経て調査は順調に進捗したが、昭和63年3月に至って北側確認調査地区にある既存駐車場の移設が遅延したことにより、履行期限を4月30日までと変更契約して調査は1カ月延長された。

全ての現場作業は4月28日に終了した。決算額は17,609,540円。

室内整理・報告書作成作業は履行期間を昭和63年4月1日から平成元年3月31日までとし、委託金額を3,833,000円とする業務委託契約を締結した。決算額は3,811,867円。

国分寺市遺跡調査会組織

(平成元年3月現在)

会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
副 会 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
理 事	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
"	坂 詰 秀 一	"
"	大 川 清	国土館大学教授
"	本 多 良 雄	国分寺市長
"	内 野 孝 治	国分寺市教育委員会委員長
"	興 津 精 二	国分寺市教育委員会教育長
"	坂 本 喜 市	国分寺市社会教育委員会議長
"	藤 間 恭 助	国分寺市文化財保護審議会委員
"	佐 藤 敏 也	"
"	松 井 新 一	"
"	吉 田 格	"
"	佐々木 護	東京都教育庁社会教育部文化課副主幹
"	進 藤 文 夫	国分寺市教育委員会社会教育部長
監 事	星 野 亮 雅	国分寺市社会教育委員
"	関 茂 雄	東京都教育庁社会教育部文化課埋蔵文化財係長

武蔵国分寺跡調査・研究指導委員会

委 員 長	滝 口 宏	(考 古)
委 員	永 峯 光 一	(")
"	坂 詰 秀 一	(")
"	大 川 清	(")

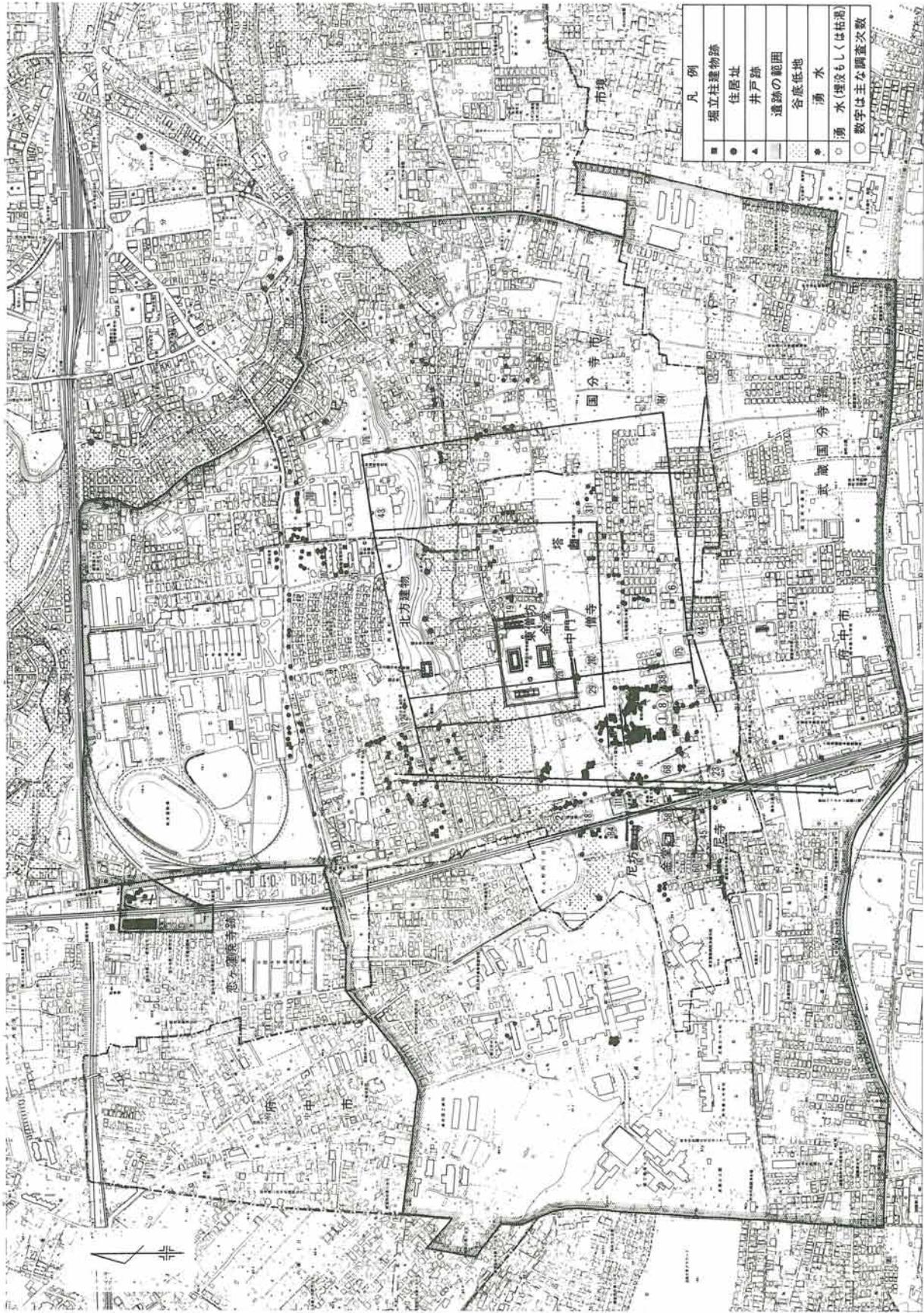
事 務 局

事 務 局 長	野 口 武 夫	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課長
事 務 局 員	田 倉 武 市	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係長
"	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課庶務係員
事 務 主 任	石 川 茂 明	

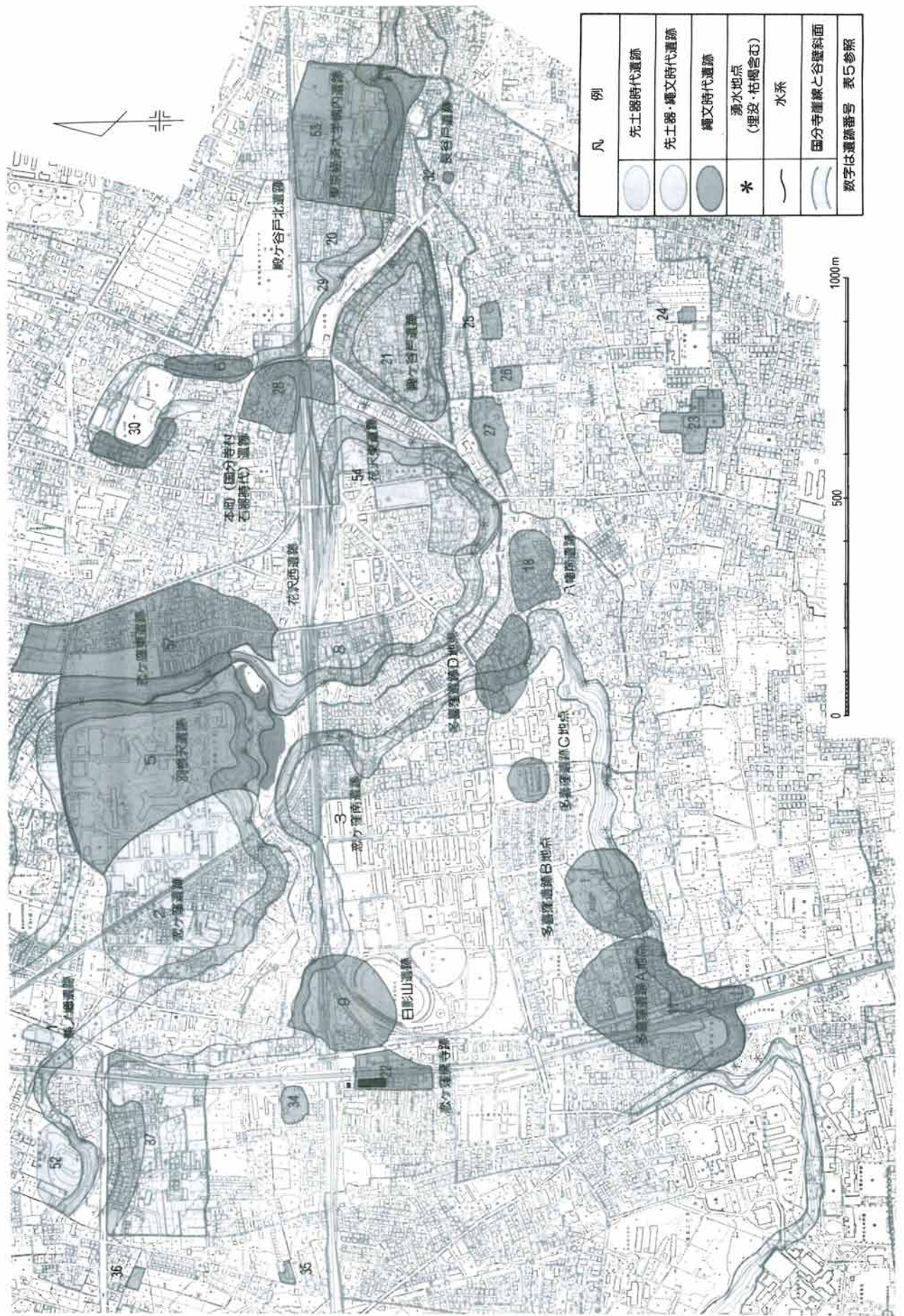
調 査 団

調 査 団 長	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会会長
主 任 調 査 員	有 吉 重 蔵	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係長
調 査 員	福 田 信 夫	国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係員
"	広 瀬 昭 弘	"

調 査 員 上 村 昌 男 国分寺市教育委員会社会教育部文化財課文化財保護係員
" 上 敷 領 久 嘱 託
" 滝 島 和 子 "



第1図 調査地区の位置(武蔵国分寺跡全体図)



凡 例	
	先石器時代遺跡
	先石器・縄文時代遺跡
	縄文時代遺跡
	湧水地点 (埋没・枯樹含む)
	水系
	国分寺崖線と谷壁斜面
数字は遺跡番号 表5参照	

第2図 調査地区の位置(市内東南部の先石器・縄文時代遺跡地図)

II 調査地区の概観

1. 調査地区の位置・立地 (第1・2図)

恋ヶ窪廃寺跡に於いては、第1次(昭和46年、武蔵野線建設工事に伴う緊急調査、306㎡)、第2次(昭和51年、確認調査、国分寺16次、684㎡)、第3次(昭和55年、西晴ビル建設工事に伴う緊急調査、国分寺104次、676㎡)、第4次(昭和56年、宝泉ビル建設工事に伴う緊急調査、国分寺130次、81㎡)、第5次(昭和56～57年、森本ビル建設工事に伴う緊急調査、国分寺134次、410㎡)などの調査が実施され、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡6棟、堀跡5条の他、土壙墓12基、火葬墓6基などの古代～中世にかかる遺構が発見され、大略三期の変遷がとらえられる寺院跡であることが判明している。遺跡の中心は武蔵野線と府中街道に挟まれた部分にあり、周辺への広がりには道路や鉄道などのため明らかになっていない。

当該事業地の南側の第4次調査によって建物の方向と合致する西溝と土坑が検出されている他、市道197号線拡幅工事(当該事業の促進道路として先行整備)に伴う緊急調査(国分寺第244次278㎡)により土坑・小穴などが散発的に発見されるにとどまっておらず、当該事業地においても古代～中世にかかる遺構が同程度かやや多く発見されるものと予測した。また、東方隣接の日影山遺跡(中期)との関連でとらえられる縄文時代の遺構・遺物が下層に存在するものと予測した。市道197号線拡幅工事に伴う緊急調査では集石・土坑・小穴などの遺構と土器・石器・礫などの遺物が発見されている。

2. 層 序 (第3図)

調査地は、野川の開析谷に北東方向に臨むために、ゆるやかに西南から東北へ傾斜(比高差20cm)しているが、堆積土の内容、層序に大きな変化はない。A-1地区及びA-3地区の東半部では、III b層まで耕作等による攪乱が及んでいた。

I a層 盛り土

I b層 表土 耕作土

II 層 黒褐色土 層厚平均10cm。A-1地区南半からA-2地区にかけてのみとらえられる。

他の地区では表土と混じっている。(II'層)

III a層 黒褐色土 層厚平均5～10cm。II層もしくはIII層の残るA-1地区南半か

らA-2地区にかけてのみみられる。縄文時代の遺物を包含する。

III b層 暗茶褐色土 層厚平均15~20cm。縄文時代の遺物を多く包含する。

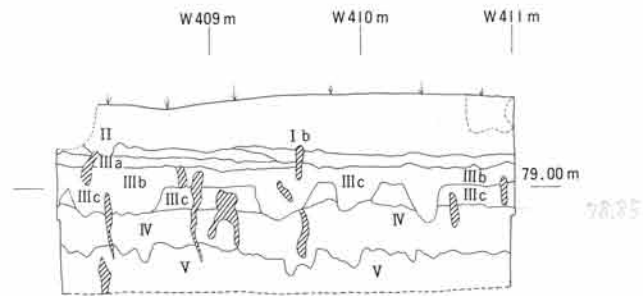
III c層 茶褐色土 層厚平均10~20cm。縄文時代の遺構は本層の上面で明瞭にとらえられる。

IV 層 黄褐色土 層厚平均15~25cm。軟質ローム層。

V 層 黄褐色土 硬質ローム層。

註1 泉町廃寺址遺跡調査会『恋ヶ窪堂址調査報告』

註2 武蔵国分寺遺跡調査会『武蔵国分寺発掘調査概報II』



第3図 標準層序 (A-1地区南壁)

Ⅲ 調査経過

調査は予定通り調査区中央のA-1地区より着手した。A-1地区における表土層は予測より浅く、為にこの北半では耕作等による攪乱を受けていた。

歴史時代遺構は西端にSD208・209南北溝跡が検出された他、土坑4基などを発見した。

並行して縄文時代の調査を進め、SS45集石などを検出した。南西区において先土器時代に石器1点が出土したので他地区においてもローム層の調査を部分的に行ったが、A-1地区では検出されなかった。(A-3地区において石器1点が発見されたにとどまる。)

10月23日に延40日間をもって同地区を終了した。

調査区南半のA-2地区においては、駐車場舗装の撤去を待って、10月22日に開始し12月17日に延36日間(通算83日目)をもって終了した。

歴史時代ではSD208・209溝跡が東へ折れ曲がっていることが判明した。

縄文時代では、礫集中地点1カ所を検出した。

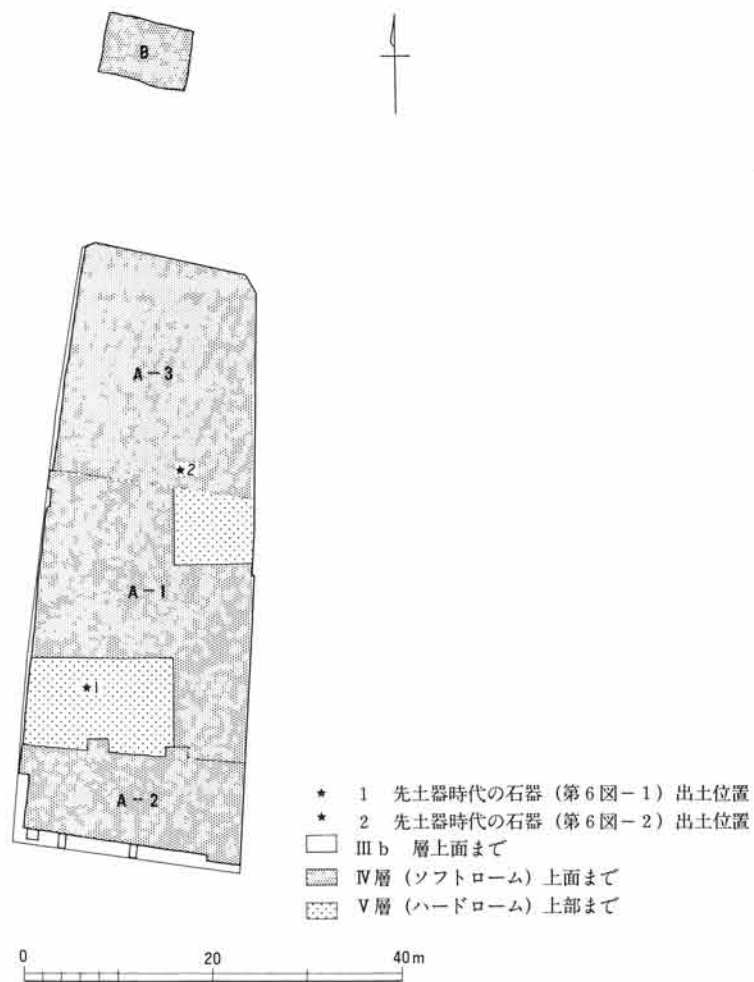
A-3地区の調査は、既存家屋の解体・撤去を待って、昭和63年1月7日に開始し、3月23日に延47日間(通算130日目)をもって終了した。

歴史時代では、SD208・209溝跡が東へ折れ曲がっていることが判明した他、土坑4基を検出した。

B地区の調査は、既存駐車場の移設を待って4月4日に開始し、4月28日に延18日間(通算148日目)で終了した。以上で全ての現場作業を終了した。

調査対象面積A地区1,362.6㎡、B地区250.0㎡の内、調査面積はA地区1,325.9㎡、B地区57.7㎡、合計1,383.6㎡である。

出土遺物は、先土器時代石器2点、縄文時代コンテナ21箱(土器1箱、石器1箱、礫19箱)、歴史時代コンテナ2箱(瓦、須恵器、土師質土器、陶器他)で、詳しくは後述する。



第4図 発掘区の区分及び発掘深度図

年月日	昭和62年/8月	9月	10月	11月	12月	昭和63年/1月	2月	3月	4月	日数
土日祝祭日	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
雨天作業中止等	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
実作業累計	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100
調査区全域	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	140
歴史時代	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	
SK	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	91
Pit	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	28
包含層発掘	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	21
縄文時代	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	14
SS	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	74
SK-J	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	8
PJ	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	7
先土器時代	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	31
備考	↑ 地区開始 第一回空掘		↑ A 地区開始		↑ 2 地区終了	↑ 3 地区開始		↑ 3 地区終了	B 地区開始 4/1	調査終了

第1表 調査工程表

IV 先土器時代の調査

A-1地区西南隅において縄文時代遺構を検出するために、IV（ソフトローム）上面まで掘削していたところナイフ形石器1点（第5図-1）を発見した。その周囲とA-1地区北東隅のIV層を掘り下げたが発見されず、A-1地区南東隅において同じく縄文時代遺構を検出するために、IV層上面まで掘削していたところ槍先形尖頭器1点（第5図-2）を発見した。

ナイフ形石器

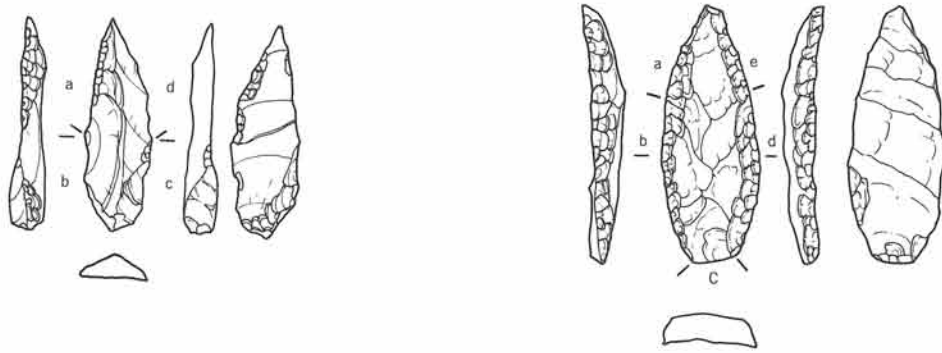
本資料の素材は縦長剥片である。二次加工は辺b・cにバルブ除去のための細部調整と辺aに階段状の剥離が施されている。さらに辺dは素材の縁辺部を刃部として利用しているものの、より鋭利な刃部を意図して、裏面に押圧剥離による微調整が施されている。形態は辺aの調整により鋭利な先端部を作り出しているが、全体に細身で辺a・dと辺b・cを分ける屈曲部はあまり明瞭ではない。いわゆる基部調整ナイフ形石器である。

槍先形尖頭器

本資料の素材は先端部がやや内湾した縦長剥片である。二次加工はc部に調整打面を持ち、素材の剥離面を利用し、その周辺部に階段状の剥離を施した周辺調整である。形態はやや小ぶりで、断面は台形である。周辺調整は辺a・eが辺b・dよりもやや大きな剥離によって先端部を尖らせている。辺b・dは比較的ゆるやかに湾曲しており左右対称である。

先土器時代石器の時期

今回の調査で出土した石器は、国分寺市域の先土器時代遺跡の調査では、III層及びIV層中より出土した石器群に類例が認められる。特にナイフ形石器は熊ノ郷遺跡IV層下部、槍先形尖頭器は恋ヶ窪遺跡III層中、花沢西遺跡ではIII層下面からIV層上面にかけて出土している。これらの時代は先土器時代終末から次の縄文時代草創期に移行する時期である。よって、本調査区における先土器時代石器の時期もおおよそこのあたりの時期に属するものと考えられる。



第5図 先土器時代の石器 (縮尺4/5)

V 縄文時代の調査

I. 遺物包含層の発掘と出土遺物

縄文時代の遺物包含層はⅢ層で、上部の黒褐色部分をⅢa層、中部の暗茶褐色部分をⅢb層、下部の茶褐色部分をⅢc層と区分できるが、遺物はⅢa層からⅢb層にかけて垂直分布中心がある。

A-1地区の北半からA-3地区の南半にかけては現代の耕作等によりⅢc層もしくはⅣ層上面近くまで削平を受けていた。対して、良好に残っていたのはA-2地区及びA-3地区の北半部分（既存家屋の下）で、その厚さは30～40cmである。

該層の調査は遺構の検出が容易となるⅢc層上面までを先行して行い、遺構調査終了後にⅣ層上面までの掘削を実施した。

包含層中からは921点の遺物が出土した。内訳は、土器503点（55%）、石器46点（5%）、礫372点（40%）である。

包含層における平面分布はA-1地区において分布が希薄となっているが、攪乱によるものと思われる。（第6～8図）

遺物は該期の遺構内をはじめ、表土や歴史時代遺構内からも多量に出土しており、はじめに全体について述べることにしていく。

土器 出土点数は、総数853点で、内訳は次の通りである。（図面3、図版5）

	1類	2類	3類	4類	5類	不明	計
SK1057J			5				5
SK1058J	1						1
SS45			6				6
礫集中地点			26				26
小穴内			22	1			23
包含層	3	96	398	1	4	1	503
表土攪乱		29	256	2	2		289
計	4	125	713	4	6	1	853

1類は早期後半条痕文系土器。2類は、平行沈線文や集合沈線文などで特徴づけられる五領ヶ台式土器。3類は、隆帯とそれに沿う角押文が施文される一群で、中部地方編年の貉沢式段階のものである。4類は、阿玉台式。5類は加曾利E式土器を一括した。

図示できた資料の内、図面3-1が小穴内出土であるほかは、全て包含層出土のものである。一括して説明する。

1~5・7が深鉢形、6・8が浅鉢形土器、1・7は隆帯とこれに沿う角押文が施文される。2は隆帯と爪形平行沈線文、刺突文が施される。3・4は隆文地文と平行沈線文が施される。5はみみずばれの隆帯貼付後に縄文が施文される。

石器 出土点数は総数62点で、内訳は次の通りである。(図面3、図版5)

	1類 a	1類 b	1類 c	2類	3類	4類 a	4類 b	5類 a	5類 b	6類	7類 a	7類 b	8類	小計
礫集中地点							1		1	1		1		4
小穴内		1									1			2
包含層			1	6	1	1		1			5	29	2	46
表土攪乱	1	1		1							1	6		10
小計	1	2	1	7	1	1	1	1	1	1	7	36	2	62

包含層出土のものが大半であるので、ここに一括して記載する。

1類は石鏃で、無脚のもの(a)、有脚で基部の抉入が浅いもの(b)、深いもの(c)に細分される。2類は打製石斧。幅の狭いものとやや幅広のものがある。3類は敲石。4類aは磨石、bは凹石。5類はスタンプ形石器である。両側縁の加工が無いもの(a)、両側縁の加工痕を有するもの(b)がある。6類は石皿。7類は剥片。加工痕を有するもの(a)と無いもの(b)がある。8類は棒状石器。これは、8類を図示した(図面3)。次に計測表を掲げる。

図面番号	種別(分類)	出土位置	最大長 _{cm}	最大幅	最大厚	重量 _g	遺存状態	石材	備考
3-1	石鏃(1-b)	PJ-60	1.9	1.5	0.35	0.8	完形存	黒曜石	
3-2	石鏃(1-a)	攪乱	1.4	1.4	0.4	0.5	完形存	黒曜石	
3-3	打製石斧(2)	SD209	7.1	4.8	1.1	25	完形存	砂岩	
3-4	打製石斧(2)	NP139区IIIb層	10.4	4.4	1.5	63.5	完形存	砂岩	
3-5	打製石斧(2)	NP139区IIIbIIIc層	10.0	6.7	2.3	174	完形存	頁岩	
3-6	打製石斧(2)	OF140区IIIb層	11.3	8.0	2.4	260	完形	砂岩	
3-7	磨石(凹石)(4類b)	礫集中地点 MS141区IIIb層下部	(8.8)	6.7	4.1	325	1/4欠損	閃緑岩	焼成受ける
3-8	石皿(6類)	礫集中地点 MS141区IIIb層下部	(10.0)	(11.0)	2.8	400	4/5欠損	閃緑岩	焼成受ける
3-9	スタンプ形石器(5類a)	NN139区IIIb層下部	15.5	8.7	5.4	1100	完形	閃緑岩	焼成受ける
3-10	スタンプ形石器(5類b)	MT140区IIIc層	10.4	7.9	4.8	610	完存	砂岩	焼成受ける

石器計測表

礫 出土点数は総数2,136点で、内訳は次の通りである。

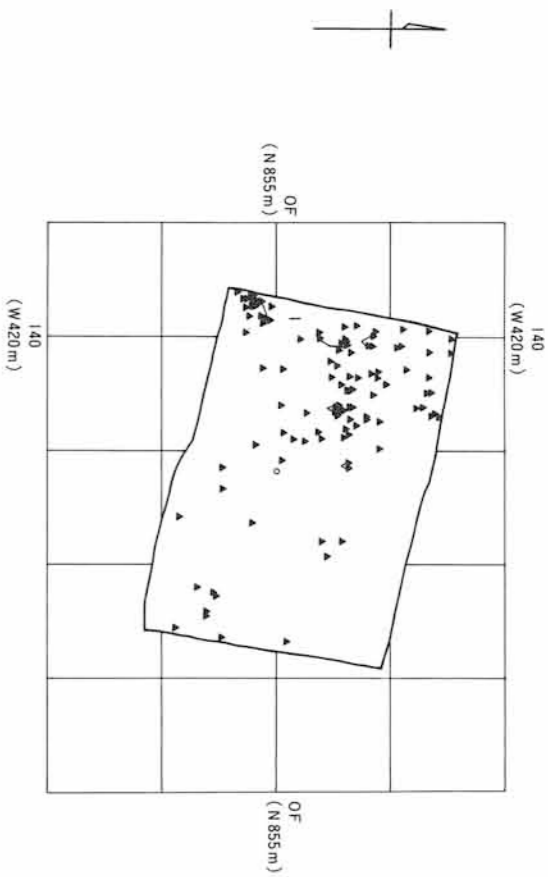
焼成状況	焼 成						未 焼 成						計
	砂 岩		チャート		そ の 他		砂 岩		チャート		そ の 他		
破 損 度	完存	破損	完存	破損	完存	破損	完存	破損	完存	破損	完存	破損	
SK1057J	1												1
SS45	12	41	2			58						3	116
礫集中地点	20	153	3	208		10		9	2	41		3	449
小 穴 内	2	9	1	2									14
包 含 層	34	182	24	57	4	50	5	4	1	1	10		372
表土攪乱	210	558	73	102	24	121	18	19	10	7	16	26	1,184
計	279	943	103	369	28	239	23	32	13	49	26	32	2,136

包含層出土の372点についてみると、焼成礫が351点（94%）で、この内286点（82%）が破損礫である。未焼成のものも含めて、16点に黒色付着物が認められた。石材別にみると、未焼成のものを含めて、砂岩225点（60%）、チャート83点（22%）、その他64点（18%）となる。

これを、遺構内出土のものと比較すると、いくつか相違点が指摘できる。

まず、SS45集石では、焼成礫が113点（97%）と多く、この他19点（88%）が破損礫でその割合がいずれも高い。また石材別にみると、未焼成のものを含めて、砂岩53点（46%）、チャート2点（1%）、その他61点（53%）と、チャートが少なく、その他が多いことが指摘できる。

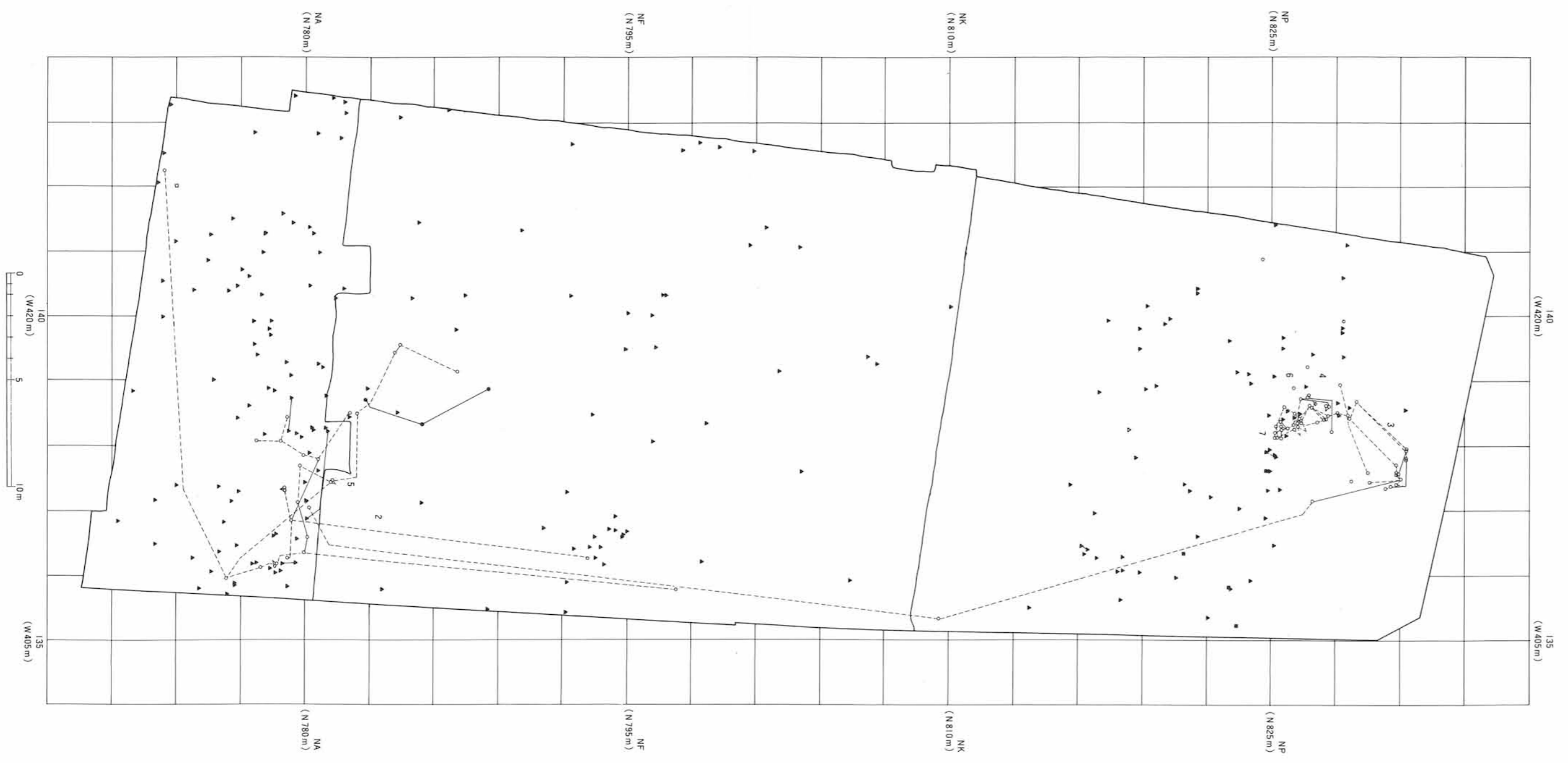
次に、礫集中地点のそれとを比べると、焼成礫が394点（88%）とやや少なく、この内371点（94%）が破損礫で、こちらの方の割合は高くなっている。石材別にみると、未焼成のものを含めて、砂岩182点（41%）、チャート254点（56%）、その他13点（3%）と、SS45とは逆に、チャートの割合が高くなっている。

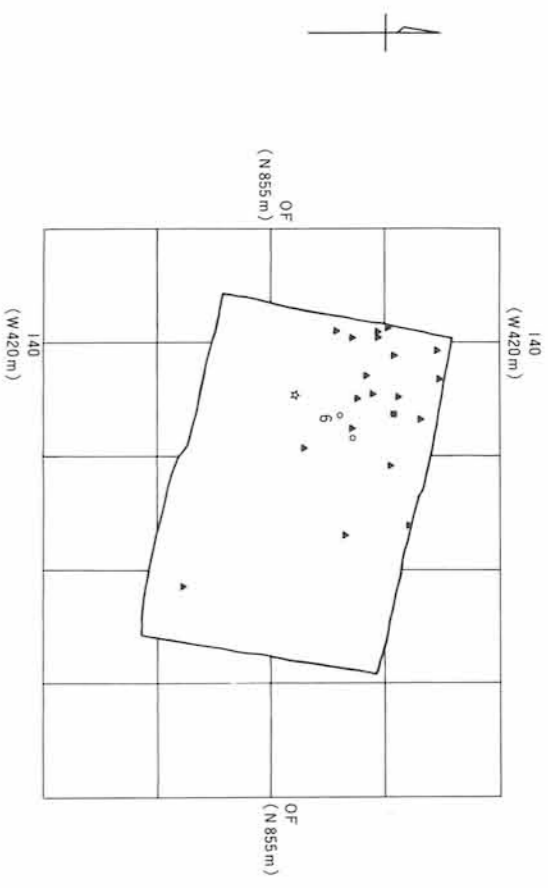


第6図 土器出土分布図 (縮尺1/200)

凡例

- 1類
- 2類 a~f
- ▲ 3類 a~g
- ▲ 4類
- 5類
- 6類

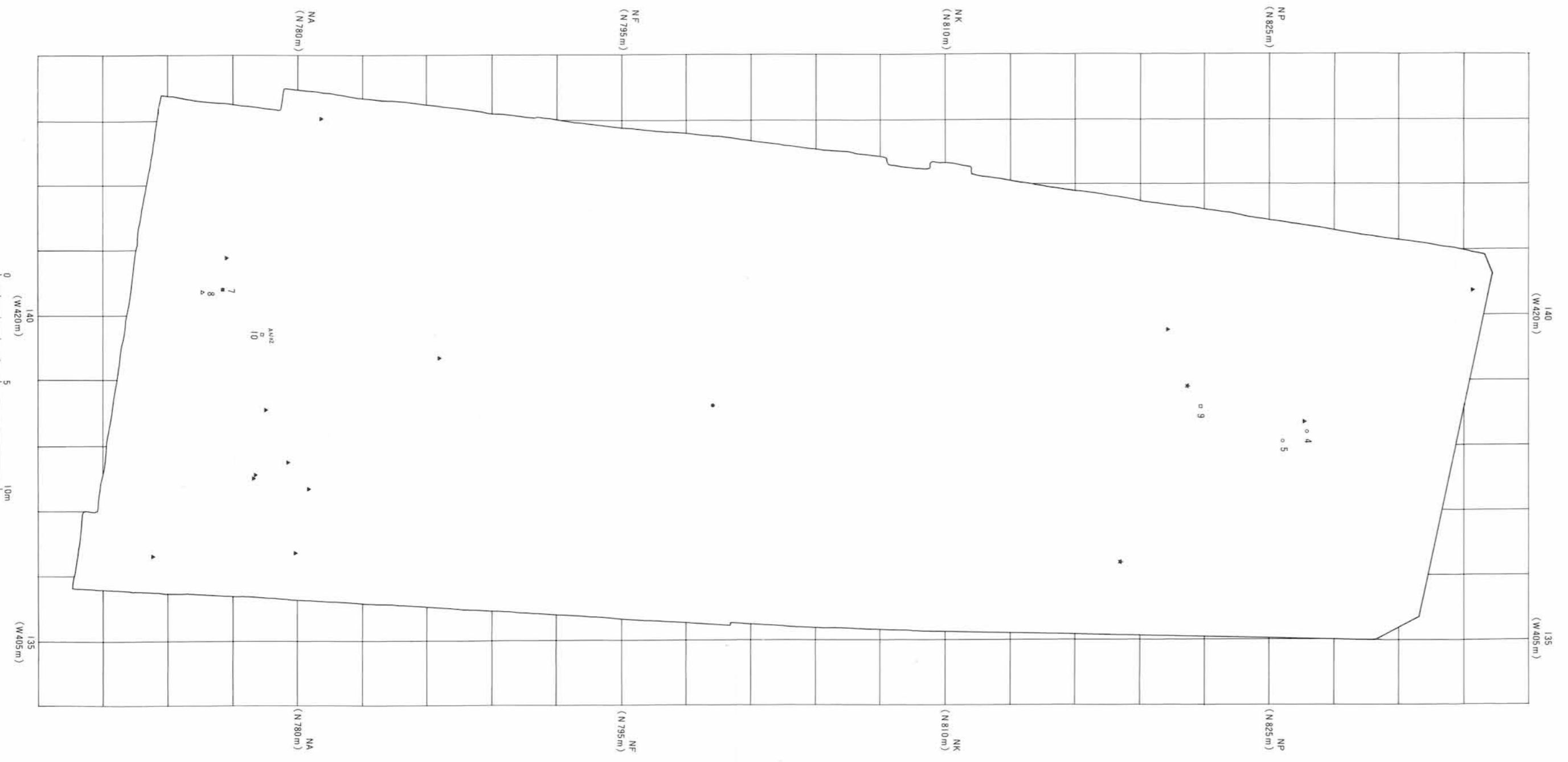


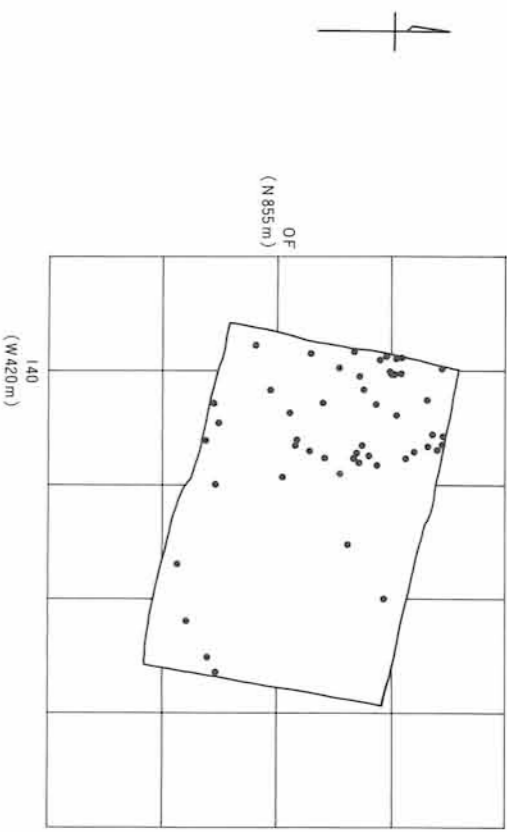


第7図 石器出土分布図 (縮尺1/200)

凡例

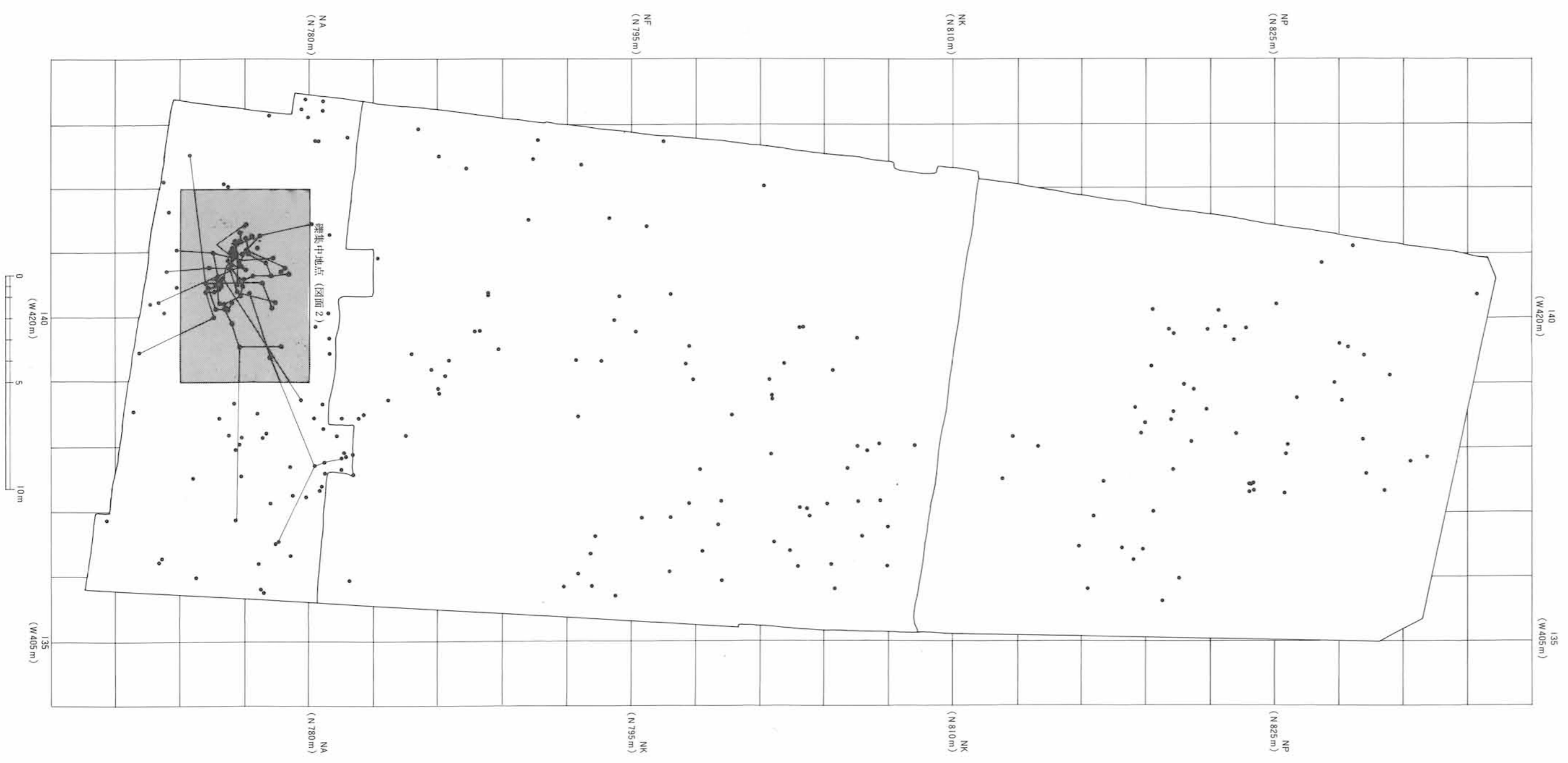
- 1類 (石鏃) □ 5類 (スタンプ形石器)
- 2類 (打製石斧) △ 6類 (石皿)
- ☆ 3類 (燧石) ▲ 7類 (フレーク)
- 4類 (磨石) ★ 8類 (その他)





第 8 图 壕出土分布图 (缩尺 1/200)

凡例
• 壕



2. 検出遺構と出土遺物 (第10図、図面1・2、図版2-4)

SK1057J 土坑

堆積土からみて人為的落ち込みと思われる。が、形態は不整形で東西1.6 m、南北2.0 mを測る。深さは最大0.8 m。断面形は擦り鉢形を呈す。

覆土中より焼けた小円礫1点と土器片5点が出土している。土器はいずれも3類に属する。

SK1058J 土坑

NB・NC141区に所在する。III c層上部にて検出した。

上面幅東西1.0~1.5 m、南北2.1 m、底面幅東西0.65 m、南北1.8 mの長方形を呈し、深さは0.8 mを測る。

長軸方位はN28°Eを示す。

底面には長軸方向に並んで2個の小ピットが穿たれている。両者の間隔は心々で0.65 m、ほぼ同じ規模で、長径0.2 m、短径0.15 m、深さ0.5 mである。

壁の立ち上がりはやや弱く、溝面はやや舟底状で平坦でない。

堆積土は上下2層に分類される。上層は黒色土、下層は暗茶褐色土である。

堆積土最下層より土器小片1点が出土しており、土坑の機能した時期を示すものと考えられる。無文の小片で(早期後半条痕文系土器)に属する。

SS45集石土坑

0.4×0.7 mの長円形で、深さ0.2 m、断面擦鉢状の土坑中の堆積土上部に、礫116点、土器6点が集まって出土した。

礫は破損礫でしかも焼成を受け一部にはスス状の黒色付着物が認められる。

比較的小きな礫が多い。土器は全て3類に属する。

礫集中地点

東西9 m、南北6 mの範囲に礫449個が集中するもので、礫の大半は破損礫で、しかも焼成を受けており、一部にはスス状の黒色付着物が認められる。

垂直分布はIII b層を中心とする。

この中でとくに集中する部分は東西3 m (W421~424)、南北3 m (N775~778)で焼成礫の接合率は高く、比較的大きな礫が多く接合するものが多い。

焼成礫が394点(88%)で包含層出土のものとは比べ、やや比率低く、石材をみると砂岩182点

(88%)、チャート254点(57%)、その他13点(2%)となっており、包含層のものと比べると、砂岩が少なくチャートが多いことが指摘される。

土器26点はすべて3類に属する。石器4点は4類に含まれる。

スタンプ形石器(3-10)、石皿(3-8)、磨石(凹石)(3-7)はいずれも焼成を受けている。このほかに剥片1点がある。

小 穴

調査区全域において小穴が155個検出された。

平面分布をみるとA-1区にやや多いことが指摘される。

規模の違い等による分析は今回できなかった。

3. 小 結

今回の調査で検出された縄文時代遺構は、その特徴と出土遺物の時期から、早期後半に属する一群と、中期初頭に属する一群に二分することができる。

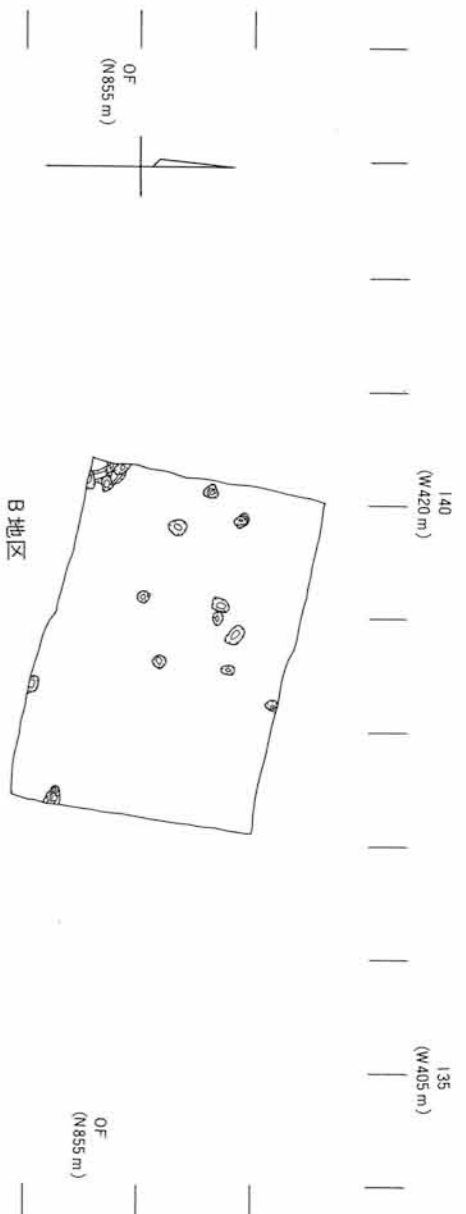
まず、早期後半に属する遺構としては、SK1058J土坑をあげることができる。いわゆる陥し穴土坑であるが、調査区周辺では初出であり、これ以外に、該期の遺構と確実にできるものはない。

土器は、本土坑出土のものを含め4点であるが、石器では、スタンプ形石器、石皿、石斧と該期の特徴を示すものの出土が目立つ。この内、スタンプ形石器や石皿などは、礫集中地点よりの出土でいずれも焼成を受けており、他の礫と一緒に、二次的に利用されたものと考えられる。

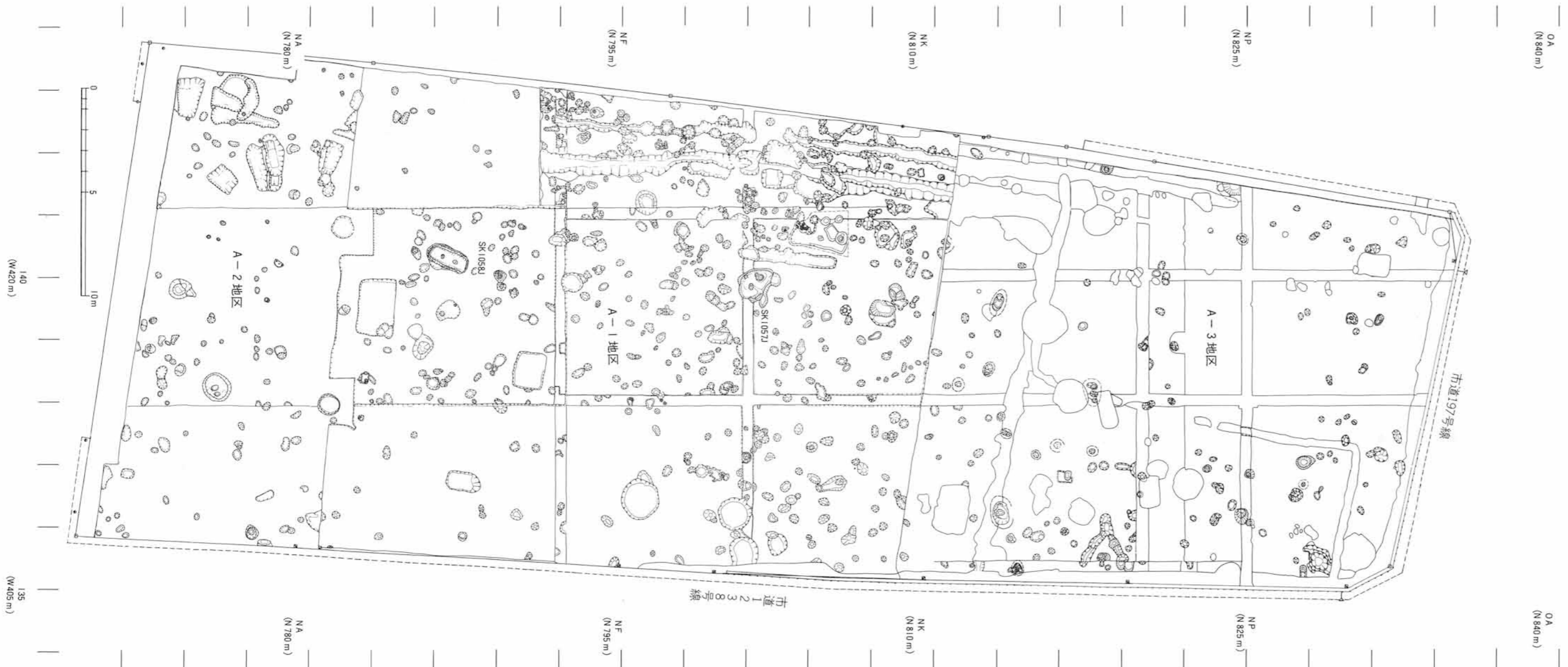
次に、中期初頭に位置づけられるものとしては、SK1057J土坑、SS45集石土坑、礫集中地点などがあげられる。包含層出土の土器をみると、該期のものは494点(98%)を占めている。

周辺における該期の遺構は、第244次調査地H坑で検出されたSS38・39集石土坑と周辺の礫集中地点があげられ、広範囲にわたっていることが伺える。

なお、第244次調査地F坑検出の土坑内からは、図示したごとく前期後半の諸磯b式期の土器が最下層から出土していることを紹介しておく。



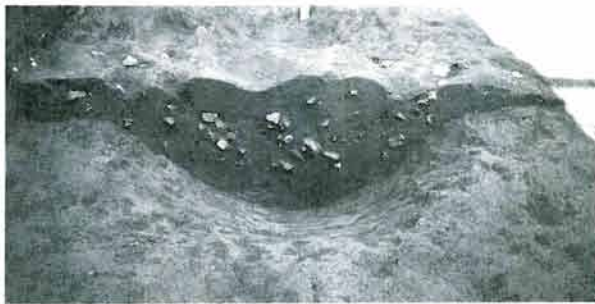
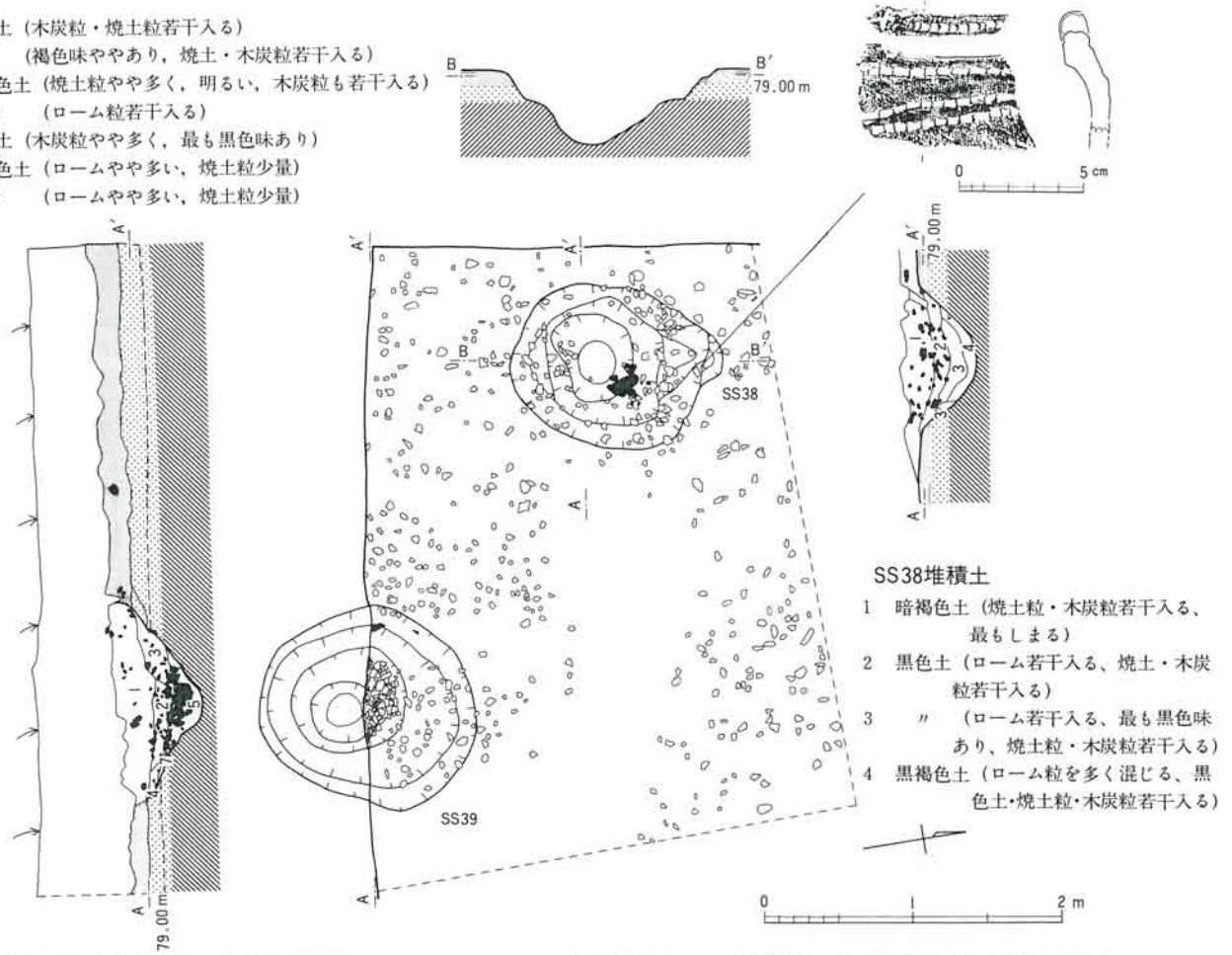
第9図 縄文時代遺構平面全体図 (縮尺1/200)





第10図 調査地区周辺縄文時代検出遺構全体図 (縮尺1/800)

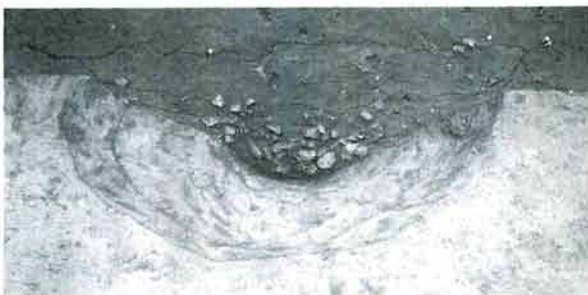
- 1 黒色土 (木炭粒・焼土粒若干入る)
- 2 " (褐色味ややあり, 焼土・木炭粒若干入る)
- 3 暗褐色土 (焼土粒やや多く, 明るい, 木炭粒も若干入る)
- 4 " (ローム粒若干入る)
- 5 黒色土 (木炭粒やや多く, 最も黒色味あり)
- 6 暗褐色土 (ロームやや多い, 焼土粒少量)
- 7 " (ロームやや多い, 焼土粒少量)



1. SS38東西土層断面 (南から)



3. SS38・39フク土上部遺物出土状態 (東から)

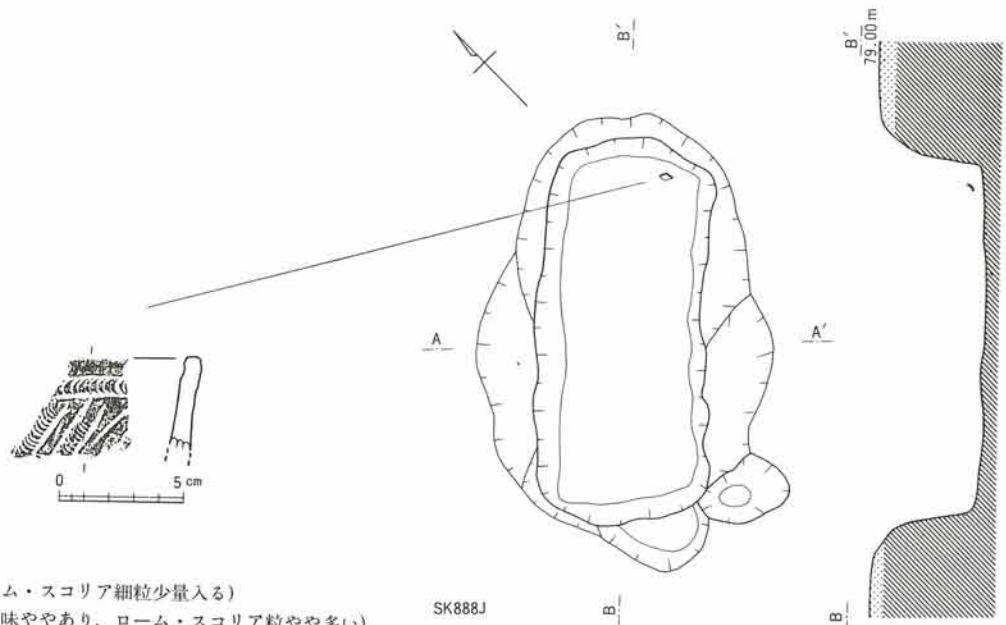


2. SS39東西土層断面 (北から)



4. SS38・39礫除去後全景 (北から)

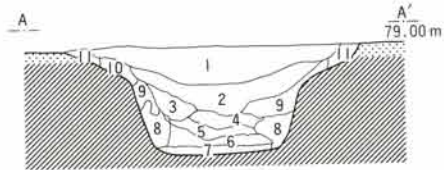
第II図 第244次調査地区検出の集石土坑



SK888J 堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム・スコリア細粒少量入る)
- 2 " (黒色味ややあり, ローム・スコリア粒やや多い)
- 3 黒色土 (ローム茶褐色土少量入る)
- 4 " (黒色味あり, ローム・スコリア若干入る)
- 5 " (ローム粒多い)
- 6 " (やや褐色味を帯びる)
- 7 " (黒色味最もあり, ローム・ロームブロック若干入る)
- 8 黄褐色土
- 9 暗黄褐色土
- 10 暗茶褐色土 (ローム少し入る)
- 11 " (汚れた茶褐色土)

SK888J



1. 土層断面 (南西から)



2. 遺物出土状態 (南西から)



3. 全 景 (北東から)

VI 歴史時代の調査

1. 発見遺構と出土遺物（第13図、図面4～5、図版7～9）

奈良・平安時代以降の遺構は表土層を除却したIII層上面にて明瞭に検出することができる。縄文時代遺構もその堆積土によっては同じ面でうっすらと輪郭を把握することができるが、両者は明確に区別できる。

さて、その堆積土はII層に類似する黒褐色土を基調とする。ただし、武蔵国分寺跡における奈良・平安時代の遺構堆積土に比べると、概して黒色味が薄く、締まりが弱い。

遺物は表土中や遺構内から、瓦、須恵器、土師質土器、かわらけ、中近世陶器、板碑、石器等が出土した。いずれも小片で復元図示し得るものは無い。

SD208・209溝跡

調査区の西端・南端・北端に検出された小溝。両溝は丁度調査区内でE形に検出され東西溝はいずれも東に延びている。

外側のSD208溝跡は、上面幅0.3m～0.8m、深さ0.1m～0.3m。南北溝は調査区南端でSD209溝と同様に東へ折れ曲がるものとみて、トレンチを設定して確認しようとしたが掘り込みが浅いこともあってその延長がSD209と同様に東へ折れ曲がるものか、南へ直進するのかが確認することはできなかった。

SD209溝跡は上面幅1.0m～1.2m、深さ0.2m～0.4mとSD208溝跡よりやや規模が大きい。

同溝はN816m付近で、直行する溝(a)と折れ曲がる溝(b)に分岐する。

分岐後のSD209aは南側のSD209溝に比べ規模が小さくなる。上面幅0.6m～0.8m、深さ0.1m～0.2mを測る。分岐したSD209b東西溝は上面幅0.8m～1.0m、深さ0.1m～0.15mである。

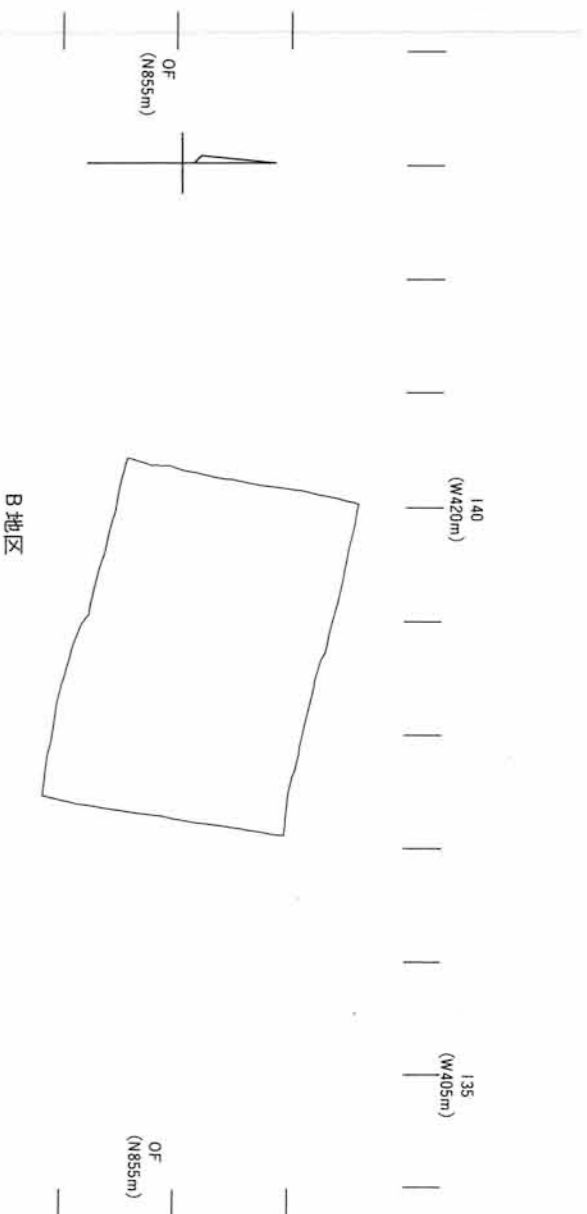
209aとSD209bの先後関係はとらえられなかった。

SD208溝跡からは、いずれも小片であるが、瓦・石器が、SD209溝跡からは、同じく小片で、男瓦・女瓦・須恵器・中近世陶器などが出土した。

中近世陶器は中世末から近世初頭頃の天目茶碗、常滑甕類の破片などであり、この溝内の終末期の時期を示すものと思われる。

SK1054土坑

東西1.0m、南北0.95mの隅丸方形プランで、深さ0.11mの土坑。長軸方位はN89°Eを示す。堆積土は黒褐色土で遺物はない。



第13図 歴史時代遺構平面全体図 (縮尺1/200)



SKI055土坑

径1 mの円形土坑。深さ0.33 m。壁はオーバーハングする。堆積土は黒色土を主とする。覆土より土師質土器2点と礫3点出土。

SKI056土坑

東西0.98 m、南北0.94 mの円形（僅かに角ばる）、深さ0.28 mの土坑。堆積土は黒色土を主とする。礫2点が出土。

SKI097土坑

東西2.4 m、南北1.5 mの隅丸方形土坑。深さ0.85 mで、壁はオーバーハングする。長軸方位N95°Eを示す。堆積土は黒褐色土を主とし、上・中・下層に分かれ、中層より礫8点と陶器1点、かわらけ3点、鉄製釘（長さ6.0 cm）が出土。

SKI098土坑

東西2.0 m、南北0.7 mの長円形土坑。深さ0.45 mで断面形は舟底形を呈する。長軸方位はN76°Eを示す。堆積土は黒褐色土を主とする。上層より男瓦1点と礫5点出土。

SKI099土坑

東西1.6 m、南北1.0 mの長方形土坑。深さ0.3 m。底面はほぼ平坦。西半部の中央付近を中心に黒色土を埋め、硬質面としていた。長軸方位はN98°Eを示す。堆積土は黒褐色土を主とする。遺物は無い。

SKI100土坑

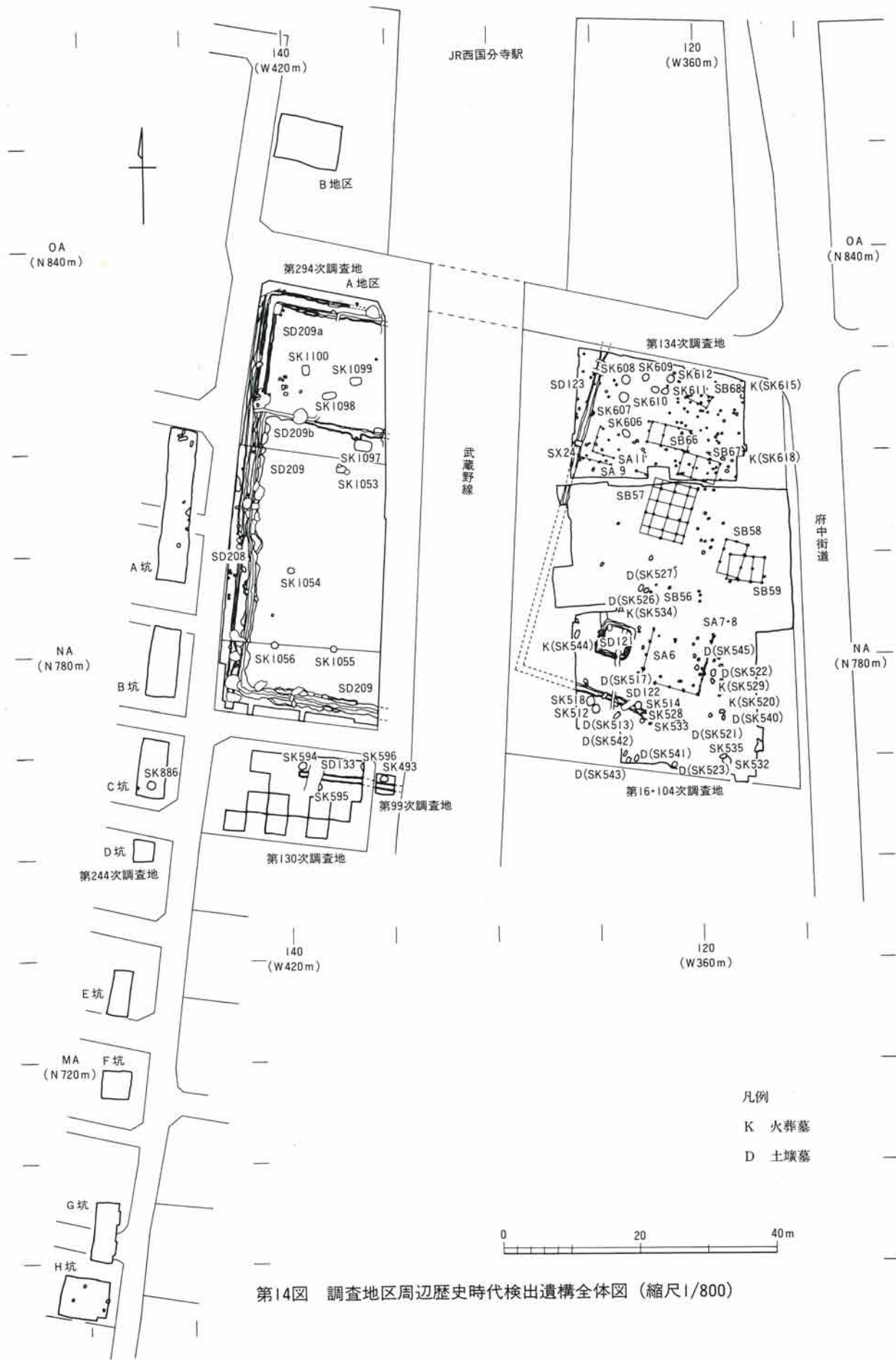
東西1.0 m、南北1.5 mの隅丸長方形土坑。深さ0.2 mで断面形は舟底形を呈する。長軸方位はN0°30'Wを示す。

堆積土は黒褐色土を主とする。上層より土器片2点（土師質土器ほか）が出土。

2. 小 結

はじめに第14図によって周辺における遺構分布を概観し、恋ヶ窪廃寺跡中心部の調査成果を要約しておく。

府中街道と武蔵野線に挟まれた本遺跡は、古瓦や板碑の出土によって江戸時代末ごろから識者の注目されるところとなっていたが、林地として開発を受けず永く保存されてきた。ところ



第14図 調査地区周辺歴史時代検出遺構全体図 (縮尺1/800)

が昭和46年の西国分寺駅建設前後から開発が進み、現在はビルが建ち並ぶ駅周辺の商業地となっている。

調査は武蔵野線建設工事に伴う昭和46年の第一次調査を皮切りに昭和55年の確認調査（第16次）を含め都合5回にわたって実施された。今次調査に先行して建設促進道路建設工事に伴う調査や第244次調査や、下水道面整備工事に伴う調査（第99次）が行われている。

調査の成果は『国分寺市史』上巻（有吉重蔵「国分寺寺域における中世遺構」）に詳述されているので要約して紹介したい。

この調査で検出された、古代～中世の遺構は、礎石建物跡1棟、掘立柱建物跡6棟、塀跡5条、溝跡5条、土橋状遺構1箇所、土壙墓12基、火葬墓6基などで、切り合い・方位・出土遺物などから大略三期の変遷が想定されている。

第一期は創建期で、SB56礎石建物跡が属す。建物は東西9m×南北10.7m、高さ0.3mの土壇状遺構の上に建てられていて、調査により礎石や根固め石が10箇所検出されているが規模は明らかでない。根固めに10世紀後半の瓦が使用されていることから平安時代後半に位置づけられる。

第二期は遺跡の東側を南北に貫く鎌倉街道に東面した伽藍を有する寺院として再建された時期で、13世紀末頃と推定される。二小期に分けられる。A期は再建伽藍の整備期で、南北57.5m（推定）×東西26m（推定）の寺域内の中央にSB57四面廂付南北棟建物（推定本堂）をおき、SB67（推定庫裏）・58掘立柱建物を配する。B期は付属建物の建替えの時期で、SB67が66に、58が59に建替えられる。他にSB68掘立柱建物跡、SA8塀跡、SD121方形周溝遺構が当期に属する。

なお、寺域内は、SA6・7・9・11塀によって区画されるが、この内SA9はSB57の北妻柱列の西延長線上に7間、SD123に沿って2間検出され、途中2間分開放されている。そして相対するSA11とSX24土橋状遺構との位置関係から、両者の間が通路として機能していたものと推察されている。

さて第三期は、寺域溝の埋没後に墓壙が築造される時期で、14世紀前半～15世紀末の年代が付与されている。第二期の建物は存続しており、火葬墓12基、土壙墓6基、火葬骨集中地点6箇所が検出されている。

溝跡について

SD208溝跡とSD209（a・b）溝跡の関係は明らかでなく、同時に存在したものか、時期の前後があるものかいずれにしても、相互に意識されて掘り込まれたものと理解できる。

SD208溝跡の南延長は掘り込みが浅くなって検出できなかったが、第130次調査区検出の

SD133溝跡の西延長も同様であって、両者はお互いに90°に交差する方向性を有し、溝の規模、形態、堆積土が近似することから両者が接続してL形をなす可能性もある。

SD208溝跡やSD209溝跡と、恋ヶ窪廃寺跡第二期の寺域区画溝であるSD122・123溝跡とは、規模、形態、堆積土が近似していることから同様に区画の施設と考えることができる。

そして、西側が口状に閉じている点、SD122・123とも共通している上に、①SD209東西溝の東延長線がSD122溝の南側墓壙群付近に至ること、②SD209b東西溝の東延長線はSB57の北妻やSX24土橋状遺構付近に至ること、③SD208溝とSD209a東西溝の東延長線はSB68掘立柱建物跡の北側に至ること、④但し、いずれの東西溝の東延長は16・104次、134次の調査では検出されていないので、その途中（武蔵野線付近）で終わっているか、曲がっているものと考えられること……などが指摘される。

両溝は出土遺物から、奈良時代後期から中世～近世初頭の幅広い年代の中でとらえられる。

土坑について

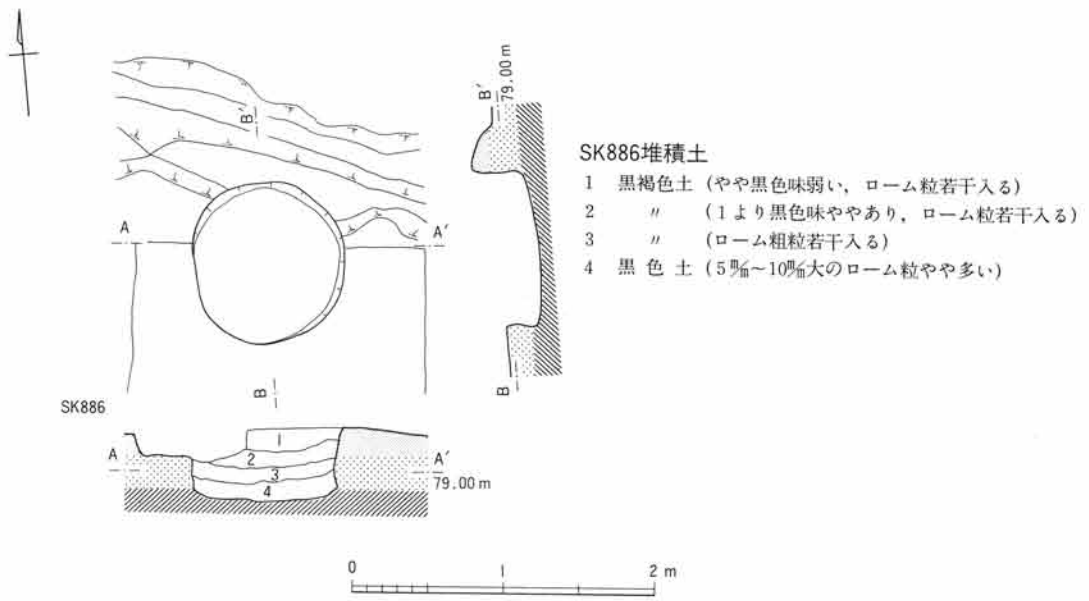
周辺調査区検出のものを含め土坑の形態分類を行ったところ、次の11種に分類される。

- A類 火葬墓① 長軸1 m以下の規模の小さい不整形土坑。長円形を基本とする。
- B類 火葬墓② 長軸1 mを超える規模、やや大きい不整形土坑。長円形を基本とする。
- C類 土壙墓① 長軸1 m前後の隅丸長方形土坑。
- D類 土壙墓② 長軸1 m前後の不整形土坑。長円形を基本とする。
- E類 径1 m前後の円形土坑。壁の立上りはほぼ垂直に近い。
- F類 径1 m前後で、各辺やや直線的になる。隅丸方形ともいうべき土坑。
- G類 径1 mを超える円形土坑。
- H類 長軸2 m前後、短軸1 m以下の長円形土坑。
- I類 長軸1.5 m、短軸1 m前後の隅丸長方形土坑。
- J類 長軸2 mを超える大形の長方形土坑。壁の立上りはほぼ垂直（オーバーハング）で深い。
- K類 不整形や部分検出のものを一括する。

調査地	土坑番号	分類	長軸長	短軸長	深さ	備考
16・104次	SK512	E	1.1	1.1	0.4	播鉢状 溝状落ち込み 部分検出
	513	C	1.1	0.6	0.25	
	514	F	1.0	0.8	0.25	
	517	C	1.1	0.7	0.2	
	518	K	1.3	1.1	0.4	
	520	A	0.8	0.7	0.13	
	521	D	1.0	0.6	0.25	
	522	D	1.1	0.7	0.15	
	523	C	1.0	0.7	0.3	
	526	C	0.9	0.6	0.2	
	527	C	0.9	0.6	0.15	
	528	K	1.4	0.4	1.2	
	529	A	0.8	0.5	0.2	
	532	G	1.3	1.2	0.3	
	533	K	0.7	0.3	0.4	
	534	A	0.7	0.4	0.1	
	535	K	1.0	0.7	0.2	
	540	D	0.9	0.4	0.1	
541	D	1.1	0.6	0.15		
542	D	1.0	0.4	0.1		
543	D	(1.1)	0.6	0.05		
544	B	1.3	0.8	0.1		
545	D	0.7	0.5	0.25		
99次	SK403	E	径 1 m 前後		—	
130次	SK594	E	1.1	1.0	0.1	
	595	E	1.0	(0.5)	0.07	
	596	E	(0.9)	(0.2)	0.15	
134次	SK606	E	1.1	1.0	0.1	
	607	G	1.4	1.3	0.2	
	608	E	1.2	1.2	0.1	
	609	E	径 1 m		0.2	
	610	E	1.1	1.0	0.2	
	611	E	1.0	0.9	0.07	
	612	F	1.0	0.95	0.15	
	615	A	1.15	(0.7)	0.2	
618	A	0.8	0.6	0.05		
244次	SK886	E	1.1	1.0	0.5	
294次	SK1053	G	1.5	1.2	0.06	
	1054	F	1.0	0.95	0.11	
	1055	E	1.0	1.0	0.33	
	1056	E	0.98	0.94	0.28	
	1097	J	2.4	1.5	0.85	
	1098	H	2.0	0.7	0.45	
	1099	I	1.6	1.0	0.3	
	1100	I	1.5	1.0	0.2	

※ () 現存値、単位 m

土坑一覧表 (土壙墓・火葬墓含む)



1. 土層断面 (南から)



2. 全 景 (南から)

第15図 第244次調査地区検出の土坑

墓壙と規定されるA～D類に対し、E～K類については機能、用途は明らかでない。

E類とした円形の小形土坑は、最も多く、13基が検出されており、SK1055・1056を含め、今次調査区の南半部から周辺にかけての範囲とSB57掘立柱建物の北方（第134次調査区）の2箇所にとまっている。

今次調査区の北半ではE類土坑はなく、G類（SK1053）・H類（SK1098）・I類（SK1099・1100）と長方形プランを基本としたタイプで、各々僅かずつ特徴を異にした一群が集中しており、南半部と対照的である。

なお、土壙墓と火葬墓はSB57の南方に集中する。

このようにタイプによる占地の相違が指摘される。

さて、今次調査（第294次）で発見された遺構群と、上記した恋ヶ窪廃寺跡主体部で検出された遺構群を比較検討すると次のようなことが指摘できる。

- ① 第294次調査では小片でしかも少量ながら平安時代の遺物（武蔵国分寺の男瓦・女瓦・須恵器・土師質土器）と中世～近世初頭の陶器、かわらけ、板碑が出土しており、おおむね、主体部における傾向と一致する。
- ② SD208・209溝（あるいはSD133溝も含めて）は、西側が閉じている点や、溝の規模形態、堆積土等恋ヶ窪廃寺跡の寺域区画溝（SD122・123溝跡）に似ていることから、同様に区画施設と考えられるが、各東西溝の東延長は、SD123区画溝西辺付近には至っていないようで、同区画溝との関係は明らかでない。
- ③ SK1055・1056土坑に類似する小型円形の土坑はSD209東西溝とSD133東西溝の周縁と廃寺主体部北方の2箇所の範囲にとまって検出されており、寺院に関連する施設の痕跡として理解されること。

以上のようなことから、今次調査で発見された遺構群は、恋ヶ窪廃寺との関連でとらえられ、SD208・209溝跡によって区画された範囲は、建物等施設が置かれない寺付属の空間地であった可能性があり、その際、南方にまとまる一類の小型円形土坑跡や北方のG～I類土坑群は、その機能との関連でとらえられるものと思われる。

遺構群の年代は、既に述べたように、平安時代後期から近世初頭までの幅広い中でとらえられ、一部終末期については、廃寺第三期が14世紀後半～15世紀末と推察されているのに対し時代が下がっているものの、恋ヶ窪廃寺跡の変遷と大半が重なっている。

VII 結 語

今次調査の成果は次の点に要約できる。

- ① 先土器時代終末期のナイフ形石器と槍先形尖頭器が発見されたことから、該期におけるこの地域の様相を伺う資料を供するところとなった。
- ② 縄文時代早期後半と中期初頭の遺構群が検出された。中期初頭期については東側隣接の日影山遺跡との関連でとらえられ、その広がりには極めて広範囲に及ぶものと考えられるに至った。
- ③ 歴史時代の遺構群は恋ヶ窪廃寺跡との関連でとらえられ、溝跡によって区画された範囲は建物等施設が置かれない寺付属の空間地であった可能性があり、土坑群はその機能との関連でとらえられるものと思われる。

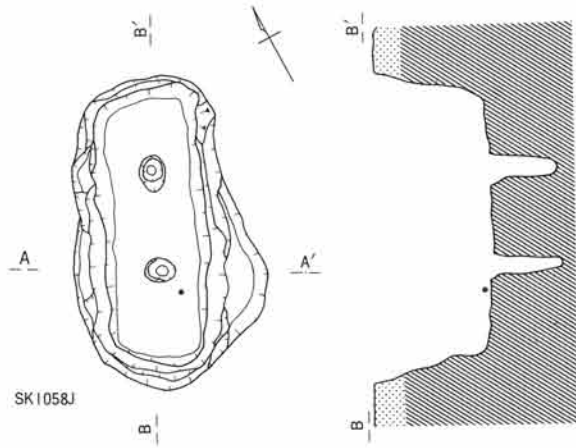
遺構群の年代は平安時代後期から近世初頭までの幅広いなかでとらえられる。すでに想定されている恋ヶ窪廃寺跡の三期に及ぶ変遷ではその終末を15世紀後半としているので主体部が終末をむかえた以降の様相を示しているものと考えられる。

なお、事業地区内であって周知の遺跡外となっているB地区において確認調査を実施した。その結果恋ヶ窪廃寺関連の遺構・遺物は発見されなかったため、本地域までは同跡の範囲は広がらないものと考えられる。

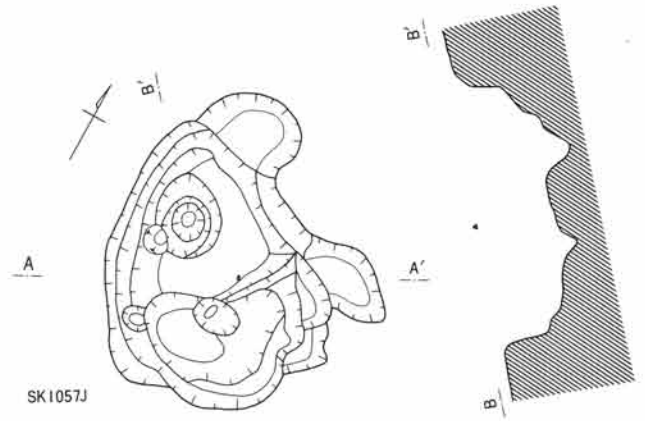
また、縄文時代の小穴と土器・石器・礫が出土したが、A地区と同様、集落周辺部における様相と理解できる。

面 図

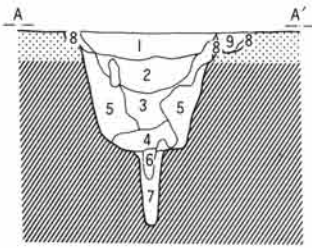
図面 I SS45・SK1057J・1058J 土坑実測図



SK1058J



SK1057J



SK1058J堆積土

上層 1 黒色土 (ローム粒・スコリア粒を少量含む)

" 2 " (1層より黒色味あり)

下層 3 暗褐色土 (ローム細粒・粗粒をやや多く含む)

" 4 " (3層よりローム粒の含有量は少ない)

" (壁際) 5 暗黄褐色土 (ローム粒・ローム粗粒・ロームブロック・暗茶褐色土粒を多く含む)

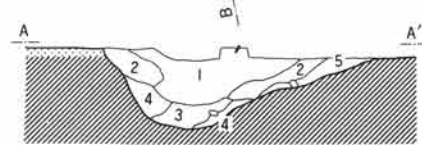
pit 6 暗褐色土 (ローム粒少量含む)

" 7 暗黄褐色土 (ローム多量に入る)

" 8 褐色土

別落ち込 9 暗褐色土 (ローム粒若干入る)

凡例
• 土器 I 類



SK1057J堆積土

1 黒褐色土 (ローム粒, 斑状に少し入る)

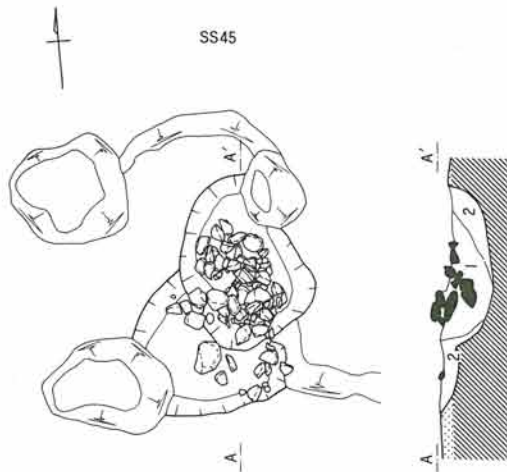
2 暗褐色土 (ロームブロック少し入る)

3 " (ローム粗粒やや多し, 黒色味ある部分あり)

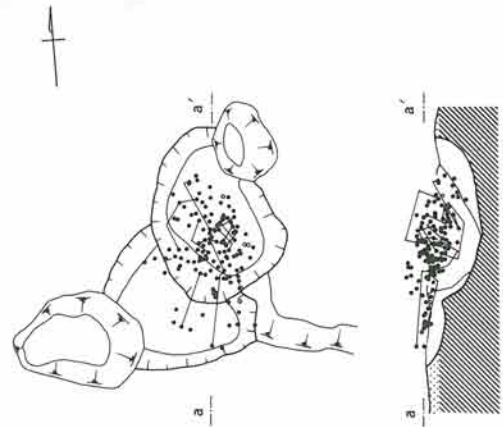
4 暗黄褐色土 (ロームブロック多量に入る, しまりあり)

5 褐色土 (ローム多い)

凡例
• 土器 3 類



SS45



SS45堆積土

1 黒褐色土 (スコリア少し入る)

2 暗褐色土 (ローム少量入る)

凡例
III b 層
III c 層
IV・V 層
遺物断面

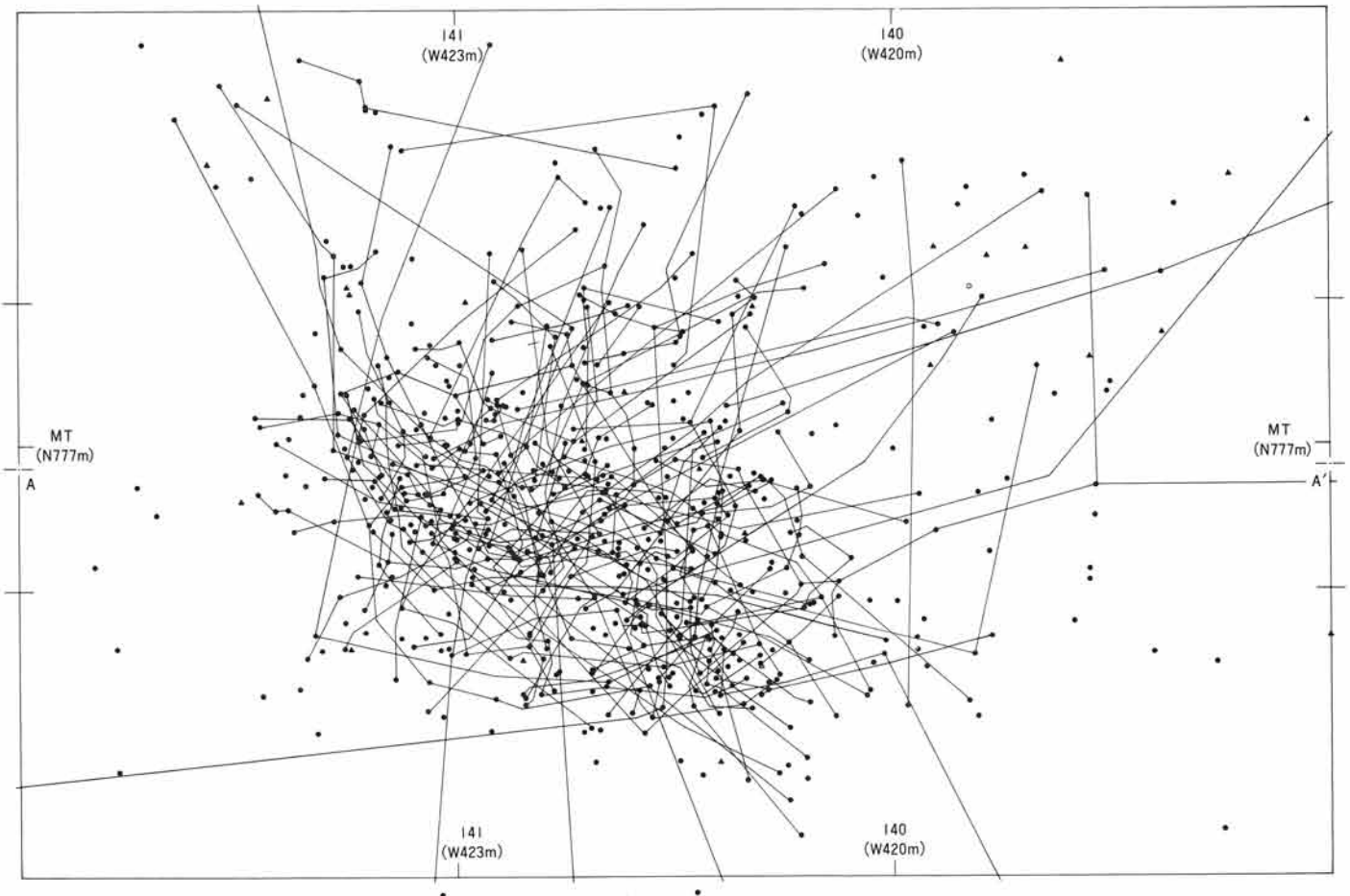
SS45凡例

• 礫
• 土器 3 類

SS45 縮尺1/25



図面 2 礫集中地点実測図

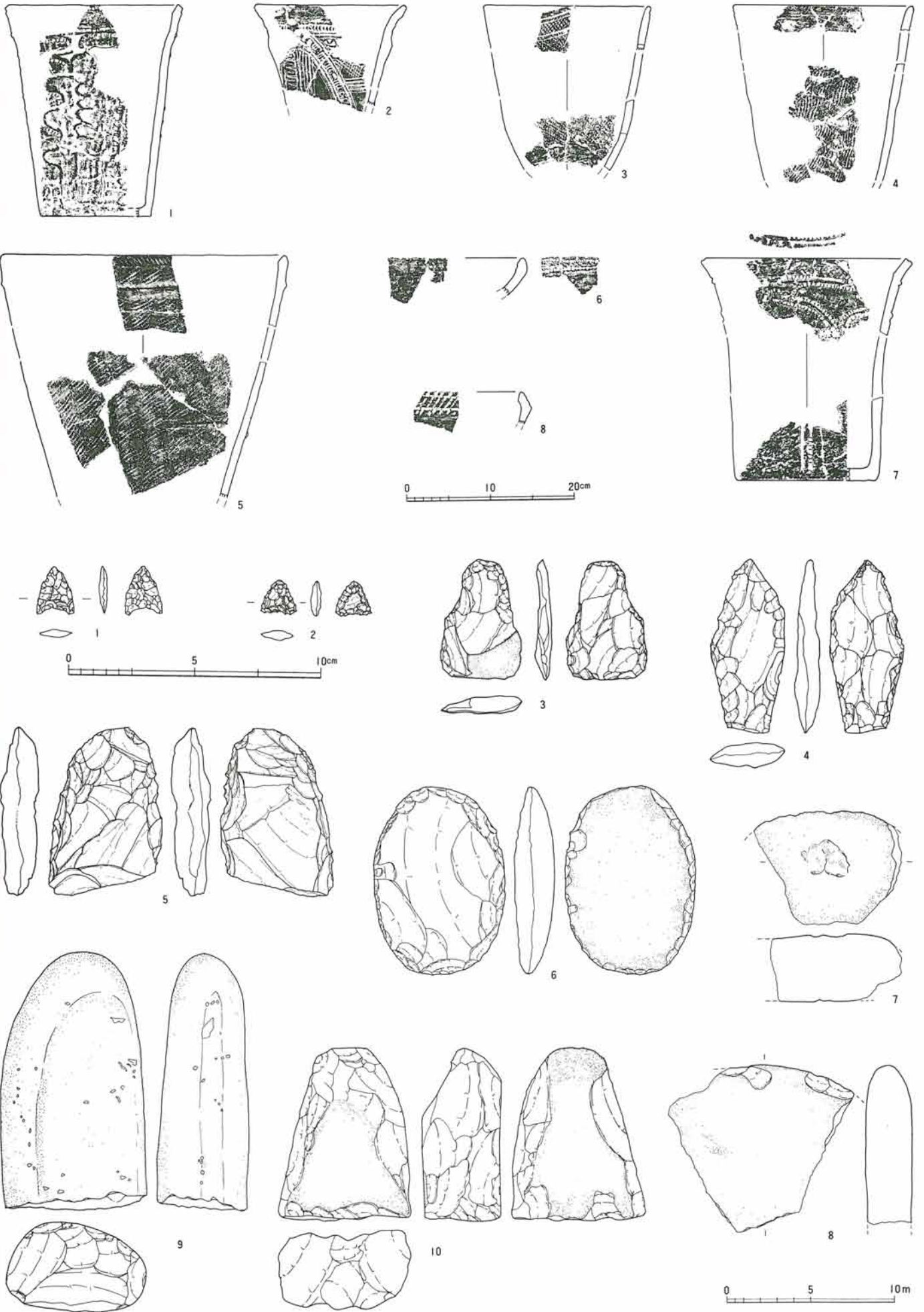


礫集中地点凡例

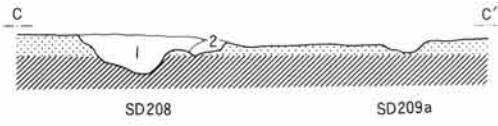
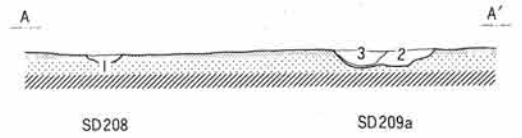
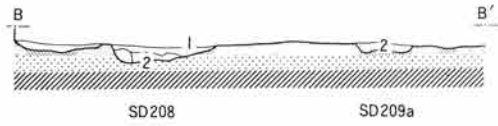
- 礫
- ▲ 縄文土器 3 類
- △ 石器 (石皿)
- " (すり石)
- " (スタンプ)
- " (フレーク)



図面3 出土土器・石器実測図

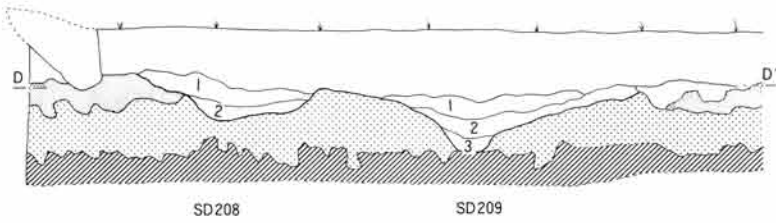
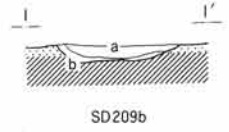


図面 4 SD208・209溝跡実測図



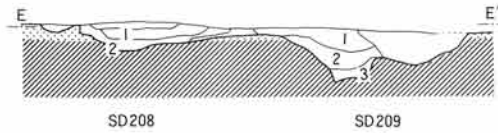
SD209b堆積土

- a 暗褐色土 (ロームやや多い)
- b 暗黄褐色土 (ローム多い)



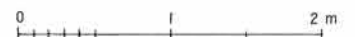
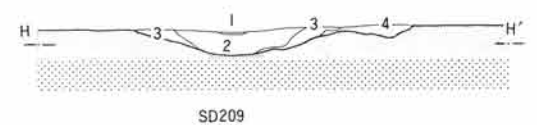
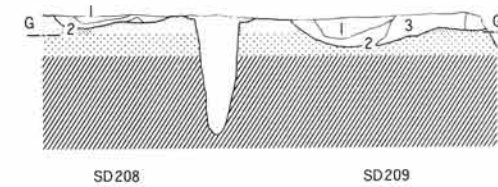
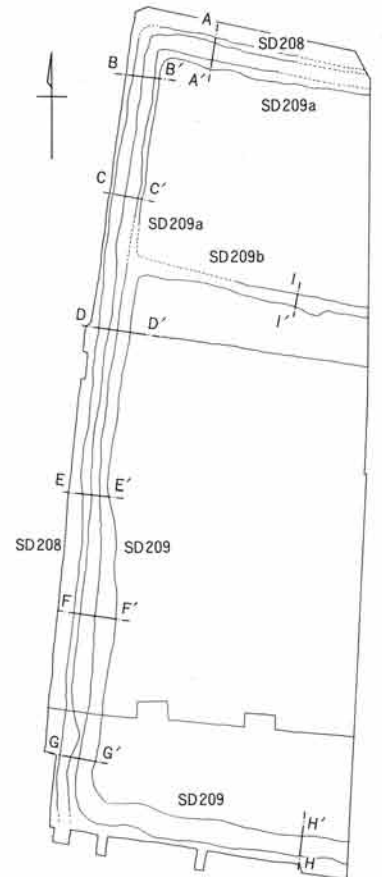
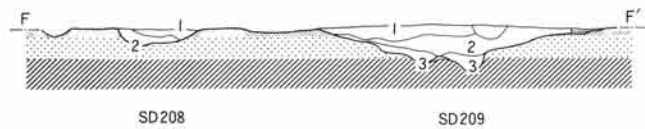
SD208堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム細粒少量含む、しまりあり)
- 2 暗茶褐色土 (ローム粒多く含む、しまりあり)

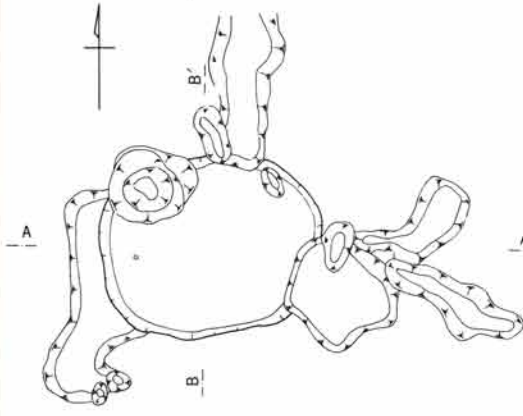


SD209・209a堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム粗粒やや多く含む)
- 2 " (ローム粗粒やや多く含む)
- 3 暗茶褐色土 (ローム粒・ロームブロック多く含む)
- 4 " (溝の立上りにして、III b層をやや掘りすぎた部分)



図面5 SKI053~1056、1097~1100土坑実測図

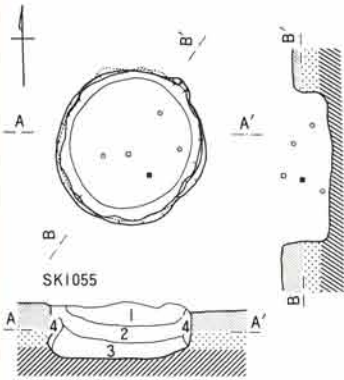
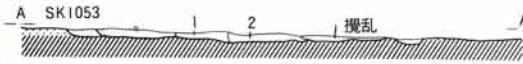
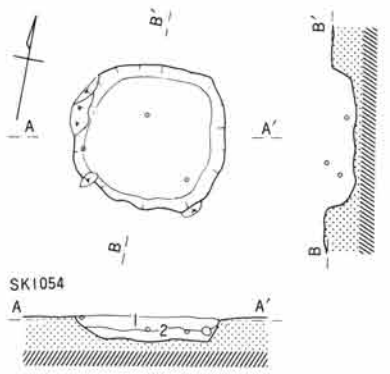


SKI053堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム・茶褐色土細粒少量入る)
- 2 " (ロームブロック・ローム粒少量入る)

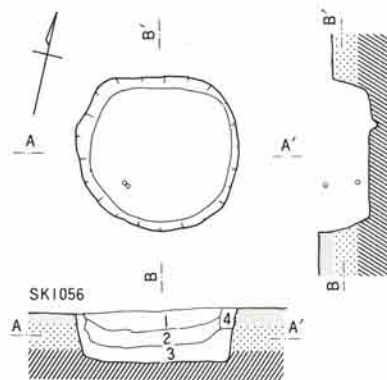
SKI054堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム粗粒・炭化物を含む)
- 2 " (ローム粒・ロームブロック少量含む)



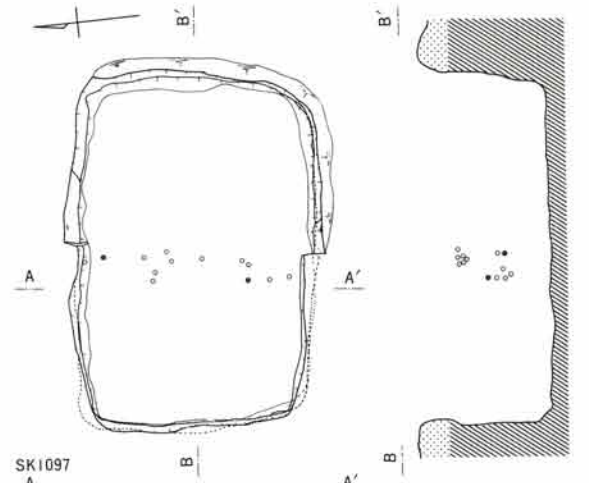
SKI055堆積土

- 上層 1 黒褐色土 (ローム・茶褐色土若干入る)
- " 2 " (ローム細粒やや多い)
- 下層 3 " (黒色味土層よりややあり、しまりあり)
- " 4 " (茶褐色土粒・ローム粒を多く含む)

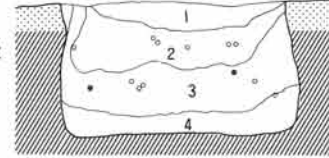


SKI056堆積土

- 上層 1 黒褐色土 (ローム粒・ローム粗粒少量含む)
- " 2 " (ローム少量含む)
- 下層 3 " (ローム少量含む)
- " 4 " (ロームやや多い)



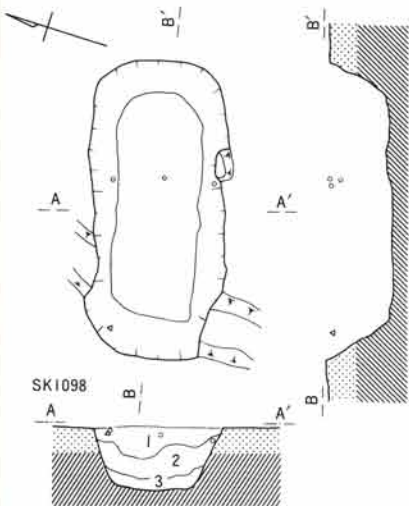
SKI097



SKI097堆積土

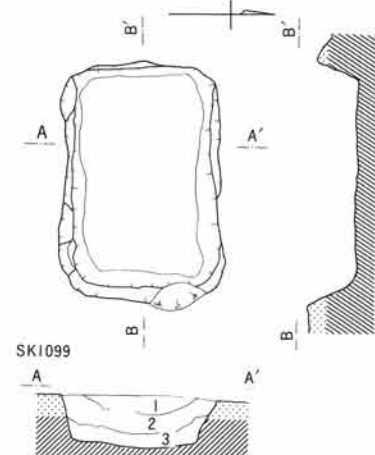
- 1 黒褐色土 (黒色味弱い、ローム細粒少量入る)
- 2 " (黒色味ややあり、しまりややあり、ローム細粒やや多い)
- 3 " (黒色味あり、しまりあり、ロームブロック少し入る)
- 4 " (黒色味最もあり、しまり強い、ロームブロックやや多い)

- 礎
- 縄文土器
- 凡 土師器
- 例 土師質土器
- ▲ 瓦



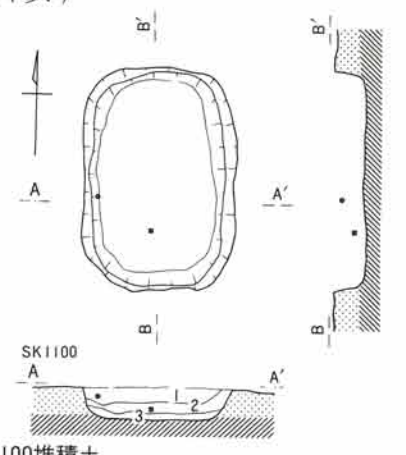
SKI098堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム細粒多く入る)
- 2 " (ローム細粒・ロームブロックやや多い)
- 3 " (しまり強まる、ローム・ロームブロックやや多い)



SKI099堆積土

- 1 黒褐色土 (黒色味弱い、ローム細粒少量入る)
- 2 " (黒色味ややあり、ローム細粒やや多い)
- 3 " (黒色味強い、しまり強い)



SKI1100堆積土

- 1 黒褐色土 (ローム細粒少量入る、黒色味弱い、しまりあり)
- 2 " (黒色味ややあり、ローム細粒少量入る、しまりあり)
- 3 " (しまり強まる、黒色味最もあり、ローム・ロームブロックやや多い)



版 図



1. 調査地上空より北を望む (JR 西国分寺駅)



2. 調査地上空より南を望む (泉町交差点方面)



3. 歴史時代遺構調査状況 (西から)
昭和62年11月9日



4. 先土器時代ナイフ形石器 <第6図-1>
出土状態 (西から)



5. 先土器時代尖頭器 <第6図-2>
出土状態 (北から)



6. A-1地区 NA137区南壁土層断面 (北から)

図版2 縄文時代遺物出土状態・SK1057J土坑



1. A-1地区遺物出土状態 (SK1058J 付近北から)



4. B地区西半部遺物出土状態 (東から)



2. 礫集中地点 (北から)



5. B地区東半部遺物出土状態 (南から)



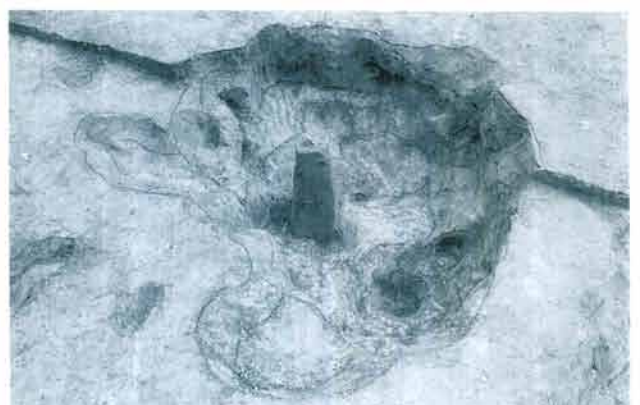
3. 礫集中地点東西ベルト土層断面 (南から)



6. B地区西半部全景 (北から)



7. SK1057J 東西土層断面 (南から)



8. SK1057J 全景 (北から)



1. 東西土層断面（北から）

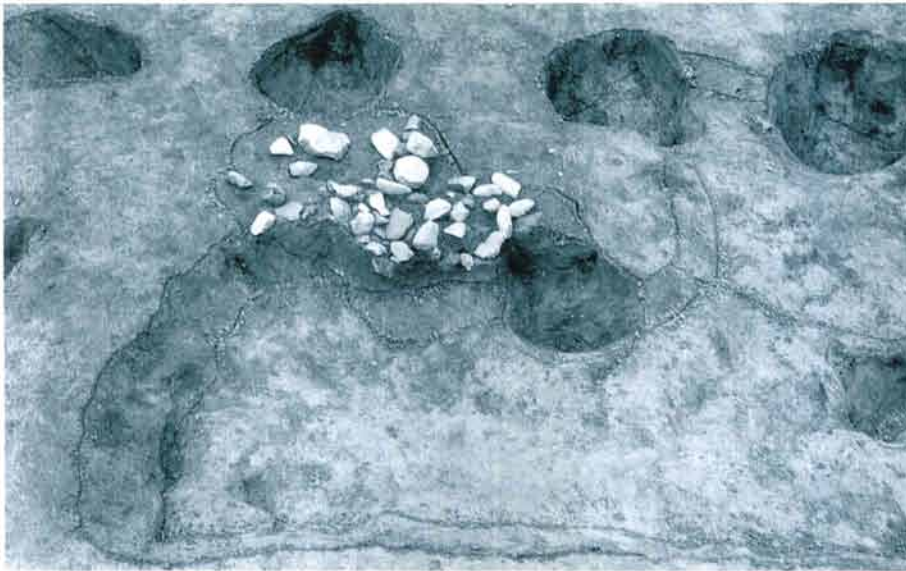


2. 全景（北から）

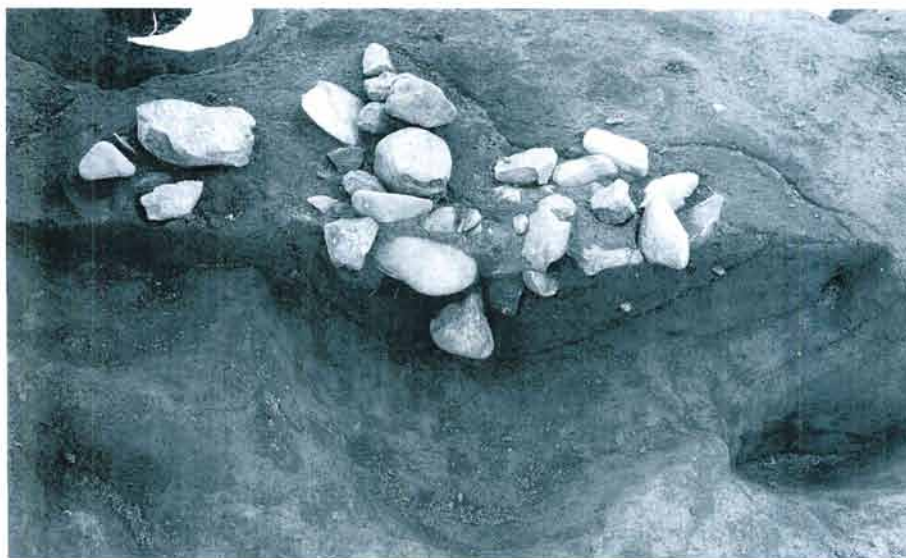


3. 遺物出土状態（西から）

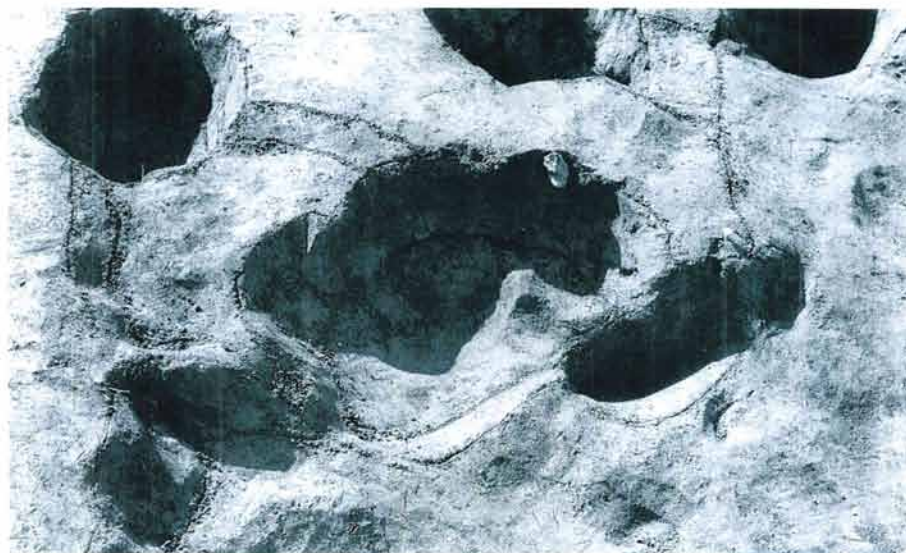
図版4 SS45集石土坑



1. 全景（東から）

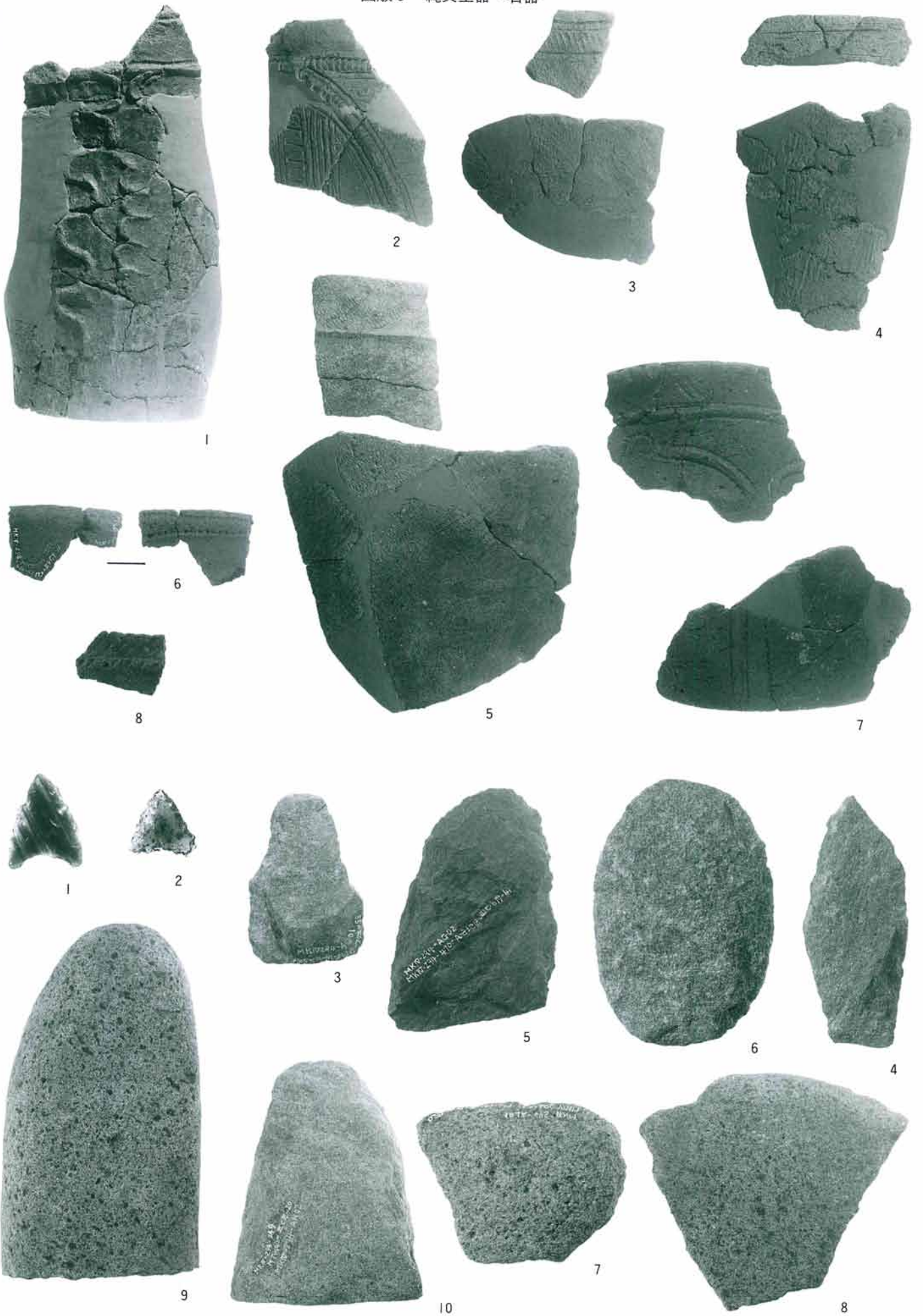


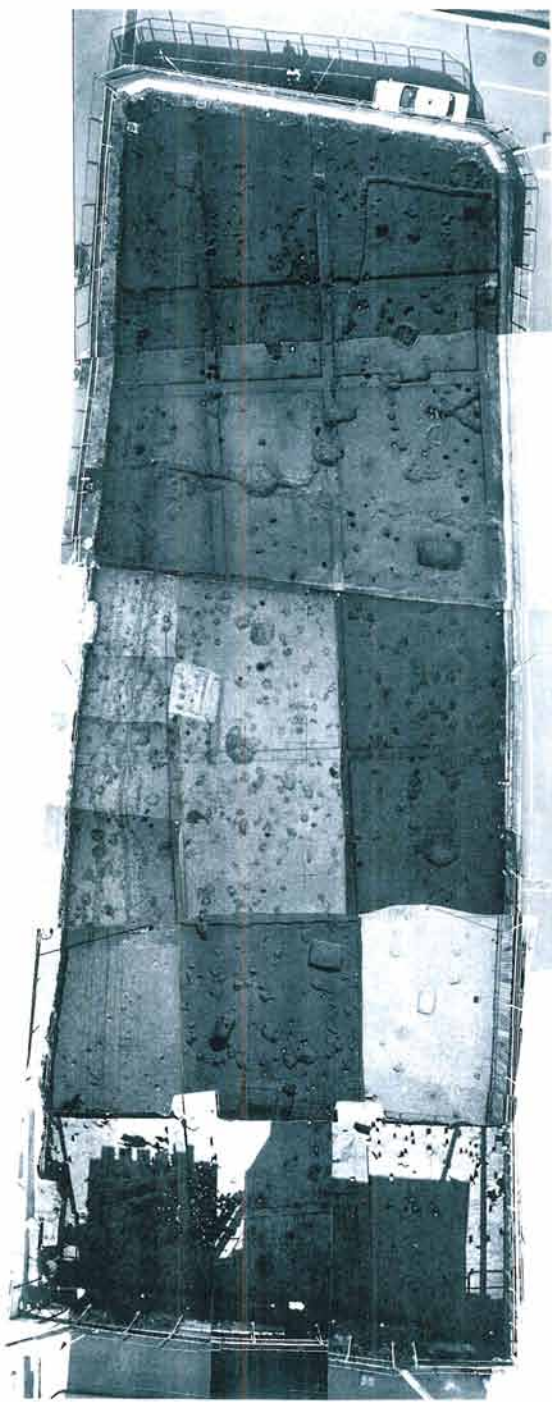
2. 南北土層断面（東から）



3. 集石除去後全景（東から）

図版5 縄文土器・石器





1. 縄文時代全景



2. 歴史時代全景



1. SD208・209東西土層断面D-D' (南から)



2. SD209b南北土層断面I-I' (西から)



3. A-1地区北側SD208・209遺物出土状態 (南から)



4. SD208・209a遺物出土状態 (東から)



5. A-1地区南側SD208・209遺物出土状態 (北から)



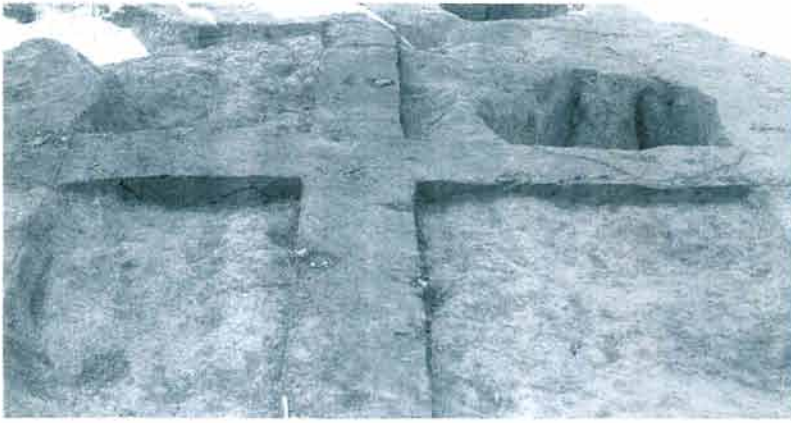
6. SD208・209a東西土層断面C-C' (北から)



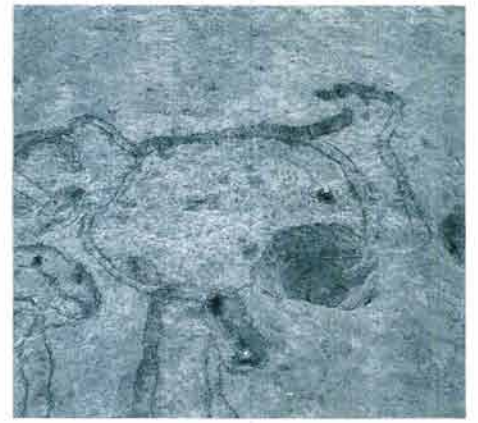
7. A-2地区SD208・209遺物出土状態 (西から)



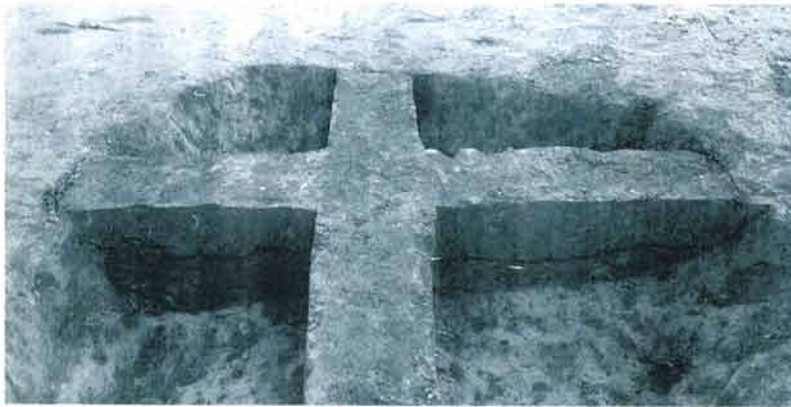
8. SD209南北土層断面H-H' (西から)



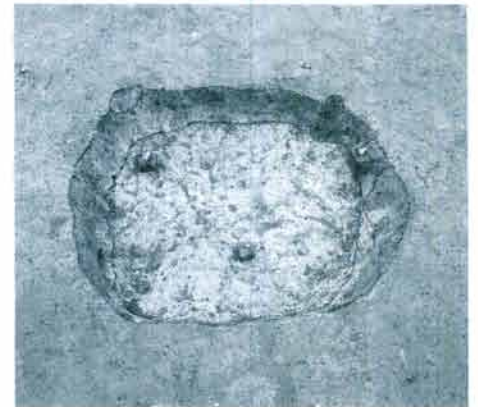
1. SK1053南北土層断面 (東から)



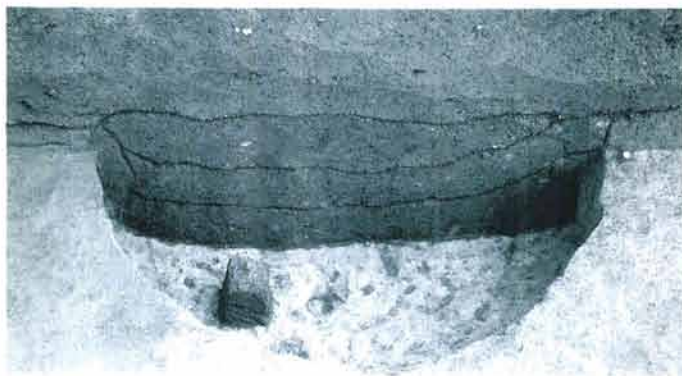
2. SK1053全景 (北から)



3. SK1054東西土層断面 (北から)



4. SK1054全景 (北から)



5. SK1055東西土層断面 (北から)



6. SK1055全景 (北から)



7. SK1056東西土層断面 (北から)



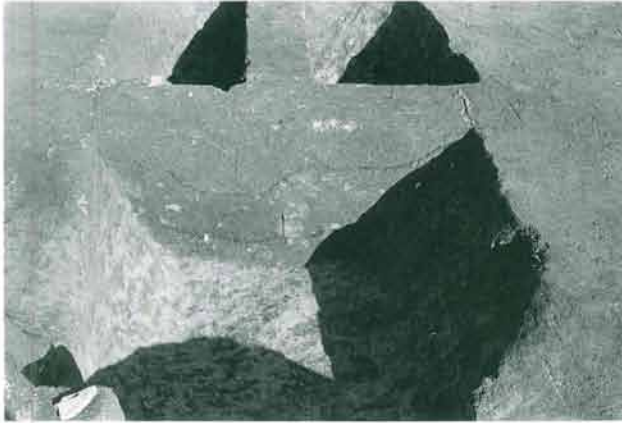
8. SK1056全景 (北西から)



1. SK1097南北土層断面 (西から)



2. SK1097全景 (東から)



3. SK1098南北土層断面 (西から)



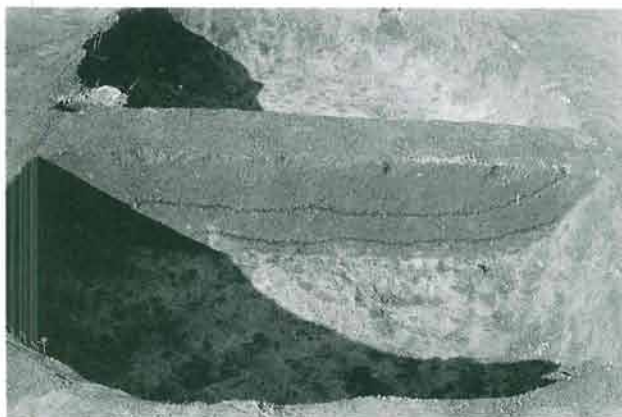
4. SK1098全景 (東から)



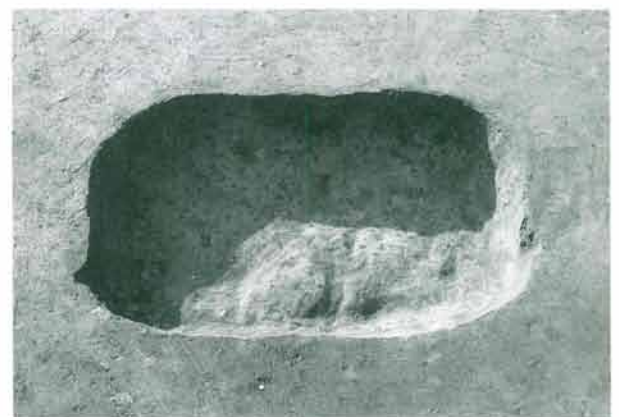
5. SK1099南北土層断面 (東から)



6. SK1099全景 (東から)



7. SK1100東西土層断面 (南から)



8. SK1100全景 (東から)

恋ヶ窪廃寺跡発掘調査概報 I

—西国分寺駅南口地区第一種市街地再開発事業に伴う調査—

発行日 平成元年3月31日
編著者 国分寺市遺跡調査団
© (団長 滝口 宏)
発行所 国分寺市遺跡調査会
〒185 国分寺市戸倉1-6-1
TEL 0423-25-0111 (代表)
東京都国分寺市教育委員会内
印刷所 ぎょうせい

令和4年(2022)2月1日 デジタル版作成